

川神のブラウニー

minmin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

川神学園の2ーFには、川神のブラウニーと呼ばれる男がいる。そんな彼の学園生活を、いろいろな人の視点から見ていきます。

※色々なまじ恋キャラクターの視点でオリ主を見ていきます。

『ストーリー性が無くて読み応えが無さ過ぎ』るらしいので、お気に召さない方はそつとブラウザバックを推奨いたします。

目次

序章：共通ルート

最上旭から見た川神のブラウニー	1
直江大和から見た川神のブラウニー	4
忍足あずみから見た川神のブラウニー	10
マルギツテ・エーベルバッツハから見た川神のブラウニー	16
九鬼英雄から見た川神のブラウニー	22
川神百代から見た川神のブラウニー	27
小島梅子から見た川神のブラウニー	32
川神鉄心から見た川神のブラウニー	36
武蔵坊弁慶から見た川神のブラウニー	41
宇佐美巨人から見た川神のブラウニー	47
井上準から見た川神のブラウニー	54
榊原小雪、川神一子から見た川神のブラウニー	59
The snow melts his heart	
榊原小雪から見た正義の味方	63
林沖から見たアーチャー	70
師岡卓也から見た主人公	75
クリステイアーネ・フリードリヒから見た錬鉄の英雄	80
クラウディオ・ネエロから見た衛宮少年	86
源義経から見た赤い弓兵1	91
源義経から見た赤い弓兵2	97
Promised place	
川神一子から見たシロ君	102
クツキーから見た衛宮士郎	107

序章：共通ルート

最上旭から見た川神のブラウニー

『最上旭先輩、ですよね。何か困ってるなら、手伝いましょうか？』

『——え？』

最初に、ちよつとぶつきらぼうな声だな、と思ったのを覚えている。直後に、最上先輩、と呼ばれたことに気づいて色々吹き飛んでしまったけれど。

書店で本を1冊買う事に1回挑戦できる、栞やカバーなどが当たらくじ引き。レシートを見せるだけでいいのかと思っていたら、どうやら携帯でなんとかコードというものを読み取らなくてはいけなかったらしい。慣れない操作にもたついて、後ろのお客さんを苛つかせているところに声を掛けてくれたのが、彼だった。……学校の後輩、それも男の子に、官能小説を買っているところを見られるのは少し恥ずかしかったけれど。

もうすぐ日が暮れますし、家まで送りますよという彼に対し、車が迎えに来るからと答えると、じゃあそれまでお喋りでもしてましよう、ということになった。少し時間があつたので、色々な話をする。彼の名前は衛宮士郎というらしい。彼が2—Fの生徒であること。(あんまりFらしくない普通の子だ、と思ってしまったのは失礼だったかもしれない)弓道部に所属していたけれど、今は退部していること。今日はアーサー王伝説に関する本を買いに来ていたこと——

口調は相変わらずぶっきらぼうなままだけど、それなりに紳士的だった。下心も見えない。そうになると、また気になってくるのは先程のこと。

『ねえ、どうして私だとわかったの？今まで、気づかれたことなんてな

かったのだけれど』

そう問うと、彼は一瞬ちらりと私と視線を合わせて――

『最上先輩のそれ、多分スキルか何か使ってるんですよ。俺、心眼（真）：B持ってるんで、多分そのせいだと思います』

なんて、よくわからない返事をしてくれた。

これが、彼と私のファーストコンタクト。全校生徒でたった1人だけ。彼だけが、私のことを知っているというのは、ちよつとくすぐつたくて。けれどもなんだか心地良くて。秘密の友人となった私達の関係は、彼がちよつとした有名人だと知った今も続いていたりする。

「――み先輩。紅茶、どうぞ」

ふわり、と立った良い香りが鼻孔をくすぐる。半ば条件反射のようにカップを持ち上げて一口飲むと、じんわりと心と身体が暖かくなつていく。

「今日も美味しいわね。元々、紅茶を特別好んでいたわけではなかったのだけれど、最近はこの一杯がないと物足りなくなってしまうわ。責任、取ってくれないと困るわよ、衛宮君？」

くすくすと笑いながらそう言うと、評議会のメンバーはうんうん頷いている女子生徒と、嫉妬の視線を向ける男子生徒に分かれていた。いや、男子生徒の何人かも頷いている。これもある意味人徳かしら。当の本人はしかめっ面してるけれどもね。

「ねえ、今度九鬼の人に頼んで、従者の服を貸してもらわない？ 従者服

で紅茶を淹れてくれないかしら」

私がそう言うと、女子生徒たちがぎゃーっと歓声を上げて、衛宮君がますますしかめっ面になった。

「貸してくれないでしょうし、万が一貸してくれたとしてもやりません。そもそも俺、評議会メンバーじゃないですし」

「それはこうして紅茶を淹れてくれてる時点で今更じゃないかしら。なんなら、議長権限で臨時議長補佐に任命します。うん、それがいいわ」・

「紅茶の為に職権乱用しないでください議長」

「少しくらいいいじゃない。〈川神のブラウニー〉の名が泣くわよ？」

「……紅茶、おかわり淹れてきます」

旗色が悪いと悟ったのか、そう言って一旦下がる衛宮君。従者服、お父様に頼めばどうにかならないだろうか。皆の前では無理でも、私の部屋で、と頼めば彼は着てくれるだろうか。そんな考えが浮かんで消えていく。

——議長補佐にしたかったのは、貴方のことを個人的に欲しいと思っているからなのよ？

ふっと浮かんだその言葉は、今はまだ心の中に止めておくことにした。

直江大和から見た川神のブラウニー

「大丈夫だとは思うけど、もしまた調子が悪くなったら言ってくれ。見に来るから」

「あ、ありがとうございます！」

朝、軍師としての仕込みとか諸々の用事があつたので京と一緒に（当たり前のように付いてきた）早めに登校すると、見知った顔がおそらく1年生の女子に何度も頭を下げられているシーンに遭遇した。向こうも俺たちに気づいたのか、表情が若干和らいだ。

「大和か。椎名も。おはよう、相変わらず仲良いんだな」

普段あまり見せない貴重な笑顔に、隣にいる後輩女子の瞳が潤んでいた。後輩にはやたらとモテるんだよな、土郎って。

「だってさ大和。結婚しよう？」

「お友達で。おはよう、土郎。……もしかして、昨日頼んだやつ？もう終わったのか？」

土郎には昨日の放課後にだらけ部の部室のエアコンの修理を頼んでいた。

「ああ、朝一番で終わらせた。ただ、電池の予備は持ってないから、そのうちリモコンの交換しておけよ。それで、折角工具持ってきてるんだからと思つてな。議長から聞いてた修理要望の出た所を回つてんだ」

それで華道部の部室の前で話してたのか。ここもエアコンか何か

が壊れてて、学園に申請が出されていたんだろう。

衛宮士郎。2―F所属の俺たちのクラスメイト。今は1人暮らしをしているけど、ゲンさんやワン子と同じ孤児院の出身で、その縁で風間ファミリーとも小さい頃から遊んでいた。……今にして思えば、面倒を見られていた、の方が正しいんだろう。なんせ、小学生の頃から今のゲンさんより大人びた言動をする子どもだったし、実際色々な分野で頼りになった。暴走しがちな姉さんを言葉でしつかり諭して止めた時には感動したくらいだ。

人物評は纏めると、自己評価が極端に低いお人好し。気がつけばいつも何処かで誰かの手助けをしているという有様で、川神学園入学当初に無償で人助けをしまくった結果、学園の依頼の運営からまったがかかったというのは有名な話だ。学園長に説教されてからは、(渋々)ささやかな報酬を受け取るようになった。だから、俺も報酬はきっちり渡す。

「後で教室で報酬渡すよ。手に入れてくれたのはクマちゃんだけだね」

「熊か、ってことは食材か何か。楽しみだな」

一応他の備品も見て回るといふ士郎にまた後でと言って別れる。さて、俺も色々準備しないと……

「はい、北海道から取り寄せた利尻昆布だよ。い〜い出汁が出るんだ」

「利尻昆布か。これから暑くなるし、冷やし出汁茶漬けの出汁にでもするか」

士郎とクマちゃんが昆布を何に使うかで盛り上がっている。寄せ

鍋もいいよねえ、なんて言ってるけど、流石にこれから夏になるのに鍋は暑いんじゃないか？

「冷たいお茶漬けかー。サツパリしてて美味しそう！でも、食べる前に出汗を取るために火使うんじゃない？、結局暑くない？」

「そうでもないぞ。俺は時間あるときに作り置きして冷蔵庫で冷やしてる」

「「「ぐふっ……!!」」」

小笠原さん羽黒を含めて女子数人が胸を抑えてうずくまる。だ、男子に女子力で負けた……って呟いてる子がいた。まあ、士郎だし仕方ない。

「あー……まあ、一番出汁とか、その辺りは覚えておいても損はないかもな。今度、やり方書いて渡すよ」

「シロ君だし仕方ないわよー。昔からとーっても美味しいし、栄養も考えてるんだから！」

ワン子が我が事のようにエツヘンときささやかな胸を張る。ついでに士郎に寄っていつて、おやつちよーだい？と目で訴えていた。士郎が苦笑いしながらクッキーらしきものを渡している。……士郎も、ワン子やゲンさんの前だと自然に笑うんだよな。

「ちなみに今日は何作ってきたの？」

「オートミールで作ったクッキー。1つ食べてみるか？」

有り難くいただく。荒っぽい麦と穏やかなはちみつの風味がして

美味しかった。ワン子用のおやつも、ちゃんと栄養バランスを考慮して全部手作りしてるんだよな。

「流石は」「川神のブラウニー」「だね」

京と綺麗に声が重なる。いえーい、とハイタッチ。士郎はしかめっ面だ。

「お前らまでやめてくれよ……それだけ仲良いんだから、さつさと結婚しちまえ」

「大和、やっぱり結婚しよう?」

「お友達で」

「むう、手強い……だが私は諦めない女なんだつ!!」

「なあ、『一番出し』ってなんかエロくね?」

「何言ってるのさヨンパチ……」

2—Fは今日もいつも通りだった。

——クリスとまゆっちが加わった金曜集会。皆、キャップのお土産を広げながらワイワイしている、幸せな時間。俺としては、ここにゲンさんと士郎も加わってほしいんだけど。

「こらー、弟。姉が話しかけてるのにぼんやりしてー。なんだ、何考えしてたんだ?まゆまゆの尻でも見てエロい妄想でもしてたのか?」

「はうあっ!？」

『まゆっちの尻はー!俺が守るー!』

一瞬で真っ赤になるまゆっちと、目つきが鋭くなるクリスと京。違
うから!

「士郎のことだよ。普段、何してるのかなってふと思ってね」

「シロ坊か。まー確かに1人暮らししだしてからそこらへん謎だよ
なー」

一応納得はしてくれたらしい。京は別の意味で目が輝いてる気がするけど、気のせいだということにしておく。

「シロウ、とはこの前言っていた衛宮殿のことだな?どのような御仁
なのだ?」

「わ、私も気になります!お友達になっていただけでしようか……
?」

クリスとまゆっちも興味津々だ。皆真面目に考えるけれど、多分、
同じこと思ってるんだろう。

「友達にはすぐなれると思うよ。どんな人かって言われると……」

そこで、他の皆の視線が自然とワン子に集まる。

「人助けして、修行して、人助けして、料理して、人助けして、人助け
してるような人ね!」

「人助けばかりじゃねーか!？」

すかさず入るガクトのツツコミ。俺もそう思うけど、でもなあ。

「実際、いつもそんな感じだかんない。俺、出かけてる時見かけるといつも何かしら人助けしてるもんない」

「正直、自分のことはいいのかって思っちゃうレベルだよ。そこらへんはしっかりしてるんだけど、それでも心配しちゃうくらいにさ」

キャップとモロが口々に同意する。姉さんも、あいつは昔からそういうやつだよな、なんて小声で呟いていた。

「義の人だな！素晴らしいじゃないか！」

『パネエ……スーパーマンか何かかよーオイー』

義の人。スーパーマン。傍から見たら確かにそうだろう。本人は、正義の味方と呼んでくれていうかもしかたないけれど。でも、普通のお人好しなだけなら、俺もこんなに気にかれたりしない。モロは言葉の通り気づいているだろうし、ひよつとしたら姉さんもか。士郎が助けたい、手伝いたいと思ってる人々の中に、士郎自身はこれっぽっちもはいつていないのだ。勿論、その自己犠牲の極みのような行動のおかげで救われる人もいる。榊原小雪が良い例だ。それでも。

士郎自身（正義の味方）にも幸せになってほしいと思う自分は、傲慢なんだろうか？

忍足あずみから見た川神のブラウニー

丁度通称『変態の橋』に差し掛かった時、英雄様が気づいた。

「——む？先に行くは我が友、トーマではないか!?あずみ、徐行に切り替えよ！」

「かしこまりました英雄様!!」

ブレーキの衝撃を全身を使って逃がしつつ、万が一にも英雄様に揺れがいかないように調節する。遠目からでもわかるハゲ頭の真横に一旦停止すると、そこにいたのは井上準。その隣に葵冬馬と、榊原小雪のいつもの3人組と——衛宮士郎だった

「我が友トーマよ！今日も壮健で何よりである！」

「おはようございます、英雄。貴方も健康そうで何よりですよ」

「おはようさん、英雄。ホント、いつも元気だねえ」

葵冬馬と井上準と言葉を交わす英雄様。こいつらはいい。問題は

……

「ねーねー士郎、ましゆまる食べるー？」

「むぐ。言いながらも口につっ込んでるじゃないか。……でも美味しいよ。ありがとう、ユキ」

「えへへー」

頭を撫でる衛宮士郎の手を嬉しそうに受け入れる榊原小雪。あー、

これはよくないな。

「衛宮士郎か。今朝はいつもの人助けは休業か？『川神の正義の味方』の名が泣くぞ？」

英雄様の声と機嫌が一段低くなった。恋心なのか、そうじゃないのかはわからないが、英雄様の想い人である川神一子に、明らかに特別に慕われている男が、朝っぱらから別の女といちやついている。そりやそうなるよな。……アタイも、そういう意味でも、個人的にも。コイツはあまり好きじゃない。何しろ、得体が知れなさすぎる。

「正義の味方はやめてくれ、九鬼。俺はそんなに御立派なもんじゃない。俺がやってるのは、偽善ですらないただの自己満足だ。『俺』という紛い物が『衛宮士郎』であるための真似事、逃避、代償行為……そんなところだよ」

「……ふん。どこかで聞いたような言葉で、よくわからんことを言うものだな」

英雄様の感情に気づいているのかいないのか、衛宮士郎は黙って肩をすくめるだけだ。ただ、真意は兎も角心から語ってはいるんだろう。戦場で、同じような奴を山ほど見てきたアタイだからわかる。コイツは、自分の存在に殆ど価値を認めていない。仲間を救うために1人で無茶して突っ込んで——簡単に死んでいく、そんな人種。

「ねえ、お話は終わった？」

場に流れた気まずい沈黙を破ったのは、意外にも葵冬馬じゃなく、榊原小雪だった。

「言ってることはよくわかんないけど……士郎が、昨日のお空みたい

にくらーい顔してるのは、僕はやだなー」

「……うん。ごめん、ユキ」

「違いますよ、士郎」

それまで黙って成り行きを見守っていた葵冬馬の突然の発言に、視線が一斉に集まる。

「そこは、ありがとう、でいいですよ」

そう言つて穏やかに笑う。……コイツも、一時期の思いつめた顔から随分明るくなったもんだ。

「……そうだな。その通りだ。ありがとう、ユキ」

「——うん!!」

その様子を、英雄様は黙って見つめていた——

「そうだぜー。人間、明るいのが一番だ。それにしても、昨日は一日中雨でずーっと暗かったもんなー。川の水も凄いことになってら」

空気を切り替えるように井上準が言う。見ると確かに、川の水が増えてそれなりの勢いで流れていた。こういう時、絶対面白半分で様子を見に行つて流されるのが出てくるんだよな……後で指示出して警戒しておかねえと。そんなことを考えてたら。

「——つユキ!! 鞆持つててくれ!!」

——空気が変わる。

榊原小雪に鞆を押し付けて空になった両の手を、衛宮士郎が頭上に掲げる。ただそれだけの所作で、周囲の空気が一変した。ピン、と張りつめた弦のような。緊張感に満ちた、侵し難い『完成された空間』へと一瞬で変化する。その中心にいる男は、鷹のような鋭い目で川の下流を見つめている。

——掲げた両手を、開くように胸まで降ろす。左手は真つ直ぐ前に。右手は、左手と平行に後方に。降ろしきった次の瞬間、その手にはいつの間にか引き絞られた弓と矢が握られていた。

空気が痛いほどに張りつめる。矢を放つ前から『当たる』と確信できてしまうほどの、圧倒的な風格。まるで、この空間そのものが衛宮士郎の引く弓と一体となったかのような錯覚。極限まで集中し、研ぎ澄まされた射手の感覚。それらが伝播したかのように、橋の上の誰もが声を出すことすらできない。

——そして、矢が放たれる。

少しばかりの静寂の後、引きのばされた時間が動き出す。周囲の一般生徒の中には、呼吸を忘れていたのか大きく息を吸っているのもあった。

「それで？貴方のことですからまた何か人助けなんでしょうけど、何を射たんですか？」

「あー、多分捨て猫だと思うんだけど、段ボールに入った子猫が流されててな。助けようと一子が川に飛び込むのが見えたから、段ボールの端を射抜いて途中の岩に止めたんだ。……なんとかなったみたいだな」

「一子殿が川に飛び込んだだど!? あずみ、一子殿は無事なのか!？」

たまらず、といった様子で声を上げる英雄様。胸がチクリ、と痛む。それを無視して双眼鏡を取り出して確認すると、川神一子が水から上がって、こちらに向かって嬉しそうにブンブンと手を振っていた。きつと、矢の主が狙いを誤ることがないということも。自分の姿を見ているということも、疑っていないんだろう。

「はい! もう岸に戻られたようです。子猫も無事みたいですよ☆」

「俺にはさーっぱり見えないけど、此処から川に流される子猫に当たらないように入れ物だけ射ってたのかよ!? 相変わらずおっそろしい腕してんな士郎は!!」

まったくだ。これで、天下五弓じゃないってんだから詐欺だよな。

「……あずみ。我は醜い男だな」

葵冬馬たちと別れて先を進んでいると、英雄様が突然そんなことを仰られた。思わず乱れそうになる車体を必死に制御する。

「ひ、英雄様が醜いなど!! そんなこと、天地がひっくり返ってもありえませんか!!」

「そうか……いや、お前がそう言うてくれるのは嬉しいが、我が我を許せぬのだ、あずみよ」

数瞬言葉を迷った後、英雄様が続ける。

「わかってはいるのだ。一子殿や榊原小雪があやつを慕うのも、積み重ねた月日とあやつ自身の人望からである。偽善と嘲る者がいくらいようと、あやつの行いは素晴らしいものである。……しかし、それらを当の本人は全く誇っていない。それどころか、自らを偽物、紛い物などと蔑んでいる。それは、あやつを慕う一子殿をも否定しているのと同じではないのか？……我には、それがどうにも許せぬのだ。それ故、ついあのような言動をしてしまう」

「英雄様……」

また、チクリと胸が痛む。英雄様に、こんなことを言わせるなんて……あの、ロボット野郎が。どうしてくれよう。いつそ、体育祭で物理的にボコボコにしてやろうか、なんて考えていたら……

——昼休み。

「衛宮士郎よ。我、九鬼英雄は貴様に決闘を申し込む！」

どうしてこうなるんでしょうか、英雄様……

マルギツテ・エーベルバッツハから見た川神のブラウ
ニー

「あ、九鬼英雄が来た」

お嬢様と昼食をとるために訪れていた2―Fの教室でその言葉を聞いたとき、珍しいこともあるものだと思った。不死川心のように悪感をもって見下していなくとも、自ら積極的に『庶民』と関わる男ではない、と判断していたからだ。

「まーたワン子を口説きに来たのか？一途だねえアイツも」

と島津岳人が言う。お前も少しくらいは一途になりなさい、と言ってやりたくなかったが……なるほど。九鬼英雄は、武神の妹である川神一子を好いているという話でしたね。

だが、大方の予想に反して九鬼英雄は川神一子ではなく――衛宮士郎に向かって歩き出した。自らの手作りだという弁当を広げようとしていた衛宮士郎は怪訝な顔だ。どうやら、心当たりがないらしい。お嬢様も興味津々といった様子で成り行きを見守っている。

「衛宮士郎よ。我、九鬼英雄は貴様に決闘を申し込む！」

これはまた、予想外な言葉が飛び出したものです。

『予め断っておくが、貴様には非や落ち度は一切ない。私の純粋な自己満足――いや、自己満足ですらないな。醜い八つ当たりだ。だが、我の中でケジメをつけるためにも、我は貴様と戦いたい！』

九鬼英雄のそんな言葉から数時間後。学園のグラウンドには放課

後であるというのに大勢の生徒や教師が集まっていた。滅多に見られない九鬼英雄の私闘ということ、かなりの数が見物にきている。勿論、2―Sの面々もだ。私も、一応此方側にいる。

「おやおや、困りましたね。私はどちらを応援すれば良いのでしょうか」

「若と英雄には悪いが、俺はユキの恩人として士郎を応援するぜ。ユキは……っというまでもないか」

「士郎ー!! 頑張れー!!」

「Fクラスの山猿など叩きのめしてやるのじゃー!!」

「英雄様……………」

ふむ? 女王蜂ならばうるさいくらいに応援するかと思っただけです
が…………妙ですね。とそこで、大声が響く。

「西! 2―S、九鬼英雄! 東! 2―F、衛宮士郎! 双方、準備はよいかの?」

お互い無言のまま前に出て、審判を務める川神鉄心に向けて頷く2人。九鬼英雄は禪姿。衛宮士郎は制服のままだった。

「それでは尋常に——始めえええい!!」

勝負開始の合図と共に構えを取る九鬼英雄。嗜みとして中国拳法を齧っただけだと聞いていましたが…………なかなか様になっている。武人を目指していれば、それなりの境地まで達していただろう。

一方の衛宮士郎は構えを取らない。両手を無造作にたらしただまま、

自然体で立っている。一見隙だらけにも見えるが——纏っている空気が、明らかに違う。幾度の戦いを越えた者だけが纏う、本物の空気。周囲もそれが感じ取れてしまうのだろう。誰かがゴクリと喉を鳴らす音がやけに大きく響いた。息を呑むような静寂が暫く続いた後——

「ホワツタアアアッ!!」

九鬼英雄が、仕掛けた。助走を付けて一気に間合いを詰めてからの飛び蹴り。防がれるも、着地してからの流れるような連続攻撃。なるほど、筋が良い。ちよつとした腕自慢程度なら倒せてしまえそうだし。しかし——その尽くが、当たらない。

衛宮士郎が、防ぐ。また防ぐ。躲す、防ぐ、捌く、躲す、防ぐ、また防ぐ。初撃の飛び蹴りを受けた時こそ僅かに後退したものの、それからは両の腕のみで、その場で九鬼英雄を攻撃を防ぎ続けている。普通、あれだけ攻め続けられればどこかでボロが出るか、焦って無理に反撃に移りそうなものだが——その鷹のような鋭い目は、感情を揺らすことなく冷静に敵を捉えていた。

スタミナが減少し、速度が落ちた九鬼英雄の蹴り足を衛宮士郎が掴む。そのまま軸足を払い、お手本のような投げで地面に叩きつけた。同時に静寂が再び破られ、ワツと歓声上がる。

「良い戦士です。あれなら、私の部下として鍛えてやってもいい」

「真剣か。現役の軍人にそう言われるなんて、士郎のやつ接近戦も凄いな」

「才能に溢れている、というわけではありません。むしろ才ならば九鬼英雄の方が上でしょう。しかし、あの男は出来得る限り自らを鍛え上げ、その上で適切にその力を振るう術を心得ています。武人としてではなく、戦士として強いのです」

なるほどな、と頷いている井上隼。しかし……決闘が始まってから、未だに無言のままの者がいる。女王蜂こと、忍足あずみ。

「どうしました、女王蜂。主が心配だとしても、あまりに貴女らしくありませんよ」

「アタイらしくない、か……そうだな。そうかもしれないねえ。アタイ、苦手だし、嫌いなんだよ、アイツのこと」

おや、これは本当に意外ですね。

「任務中、それもまだ学生相手にそこまで個人的感情を持ち込むとは本当に珍しい。一体、彼の何が苦手だというのですか？私もお嬢様の周囲の者として一通りの調査はしましたが、むしろ好青年の部類だと判断しますが」

衛宮士郎。お嬢様のクラスメイト。10年程前に自宅の火災で両親を失い、その後暫く川神一子や源忠勝と同じ孤児院で暮らす。川神学園入学と同時に焼け残ったかつての離れを改装し1人暮らしを開始。

成績は取り立てて良い訳ではないが、英語は堪能。後見人を小島梅子が引き受けていることからFクラスに編成された。私生活はほぼ自己鍛錬と慈善活動に費やしており、何事もない日でさえボランティアで清掃活動をしていることから『川神のブラウニー』と呼ばれ地元民から親しまれている。

「……お前、それおかしいと思わねえか？」

何度も立ち上がり、果敢に挑むも再び投げ倒される九鬼英雄を苦しそうな目で見つめながら女王蜂がポツリとこぼした。

「おかしい？何がです？」

「その程度のことは九鬼も、いや、もっと詳しく調べた。アイツには合法違法問わず海外へ渡った経歴はない。川神で命の危険を伴うような抗争は滅多に起きないし、あってもそれはほぼ九鬼絡みだ。アイツがそれに絡んできたことはない。アイツは至って平穩にこの街で暮らしてきただけだ」

「なら——」

「——なら、アタイや『獵犬』のお前が認めてしまうほどの経験と風格を、アイツは何処で手に入れた？」

それ、は……

「実は見掛け倒しの虚勢でしたってか？ありえねえ。そこを勘違いするほど鈍ってねえよ、アタイは。アレは間違いなく、糞みてえな戦場を踏み越えて、殺し殺されしてきたやつ顔だ」

決着が近い。ふらつきながらも繰り出した九鬼英雄の拳を躲し、あれは——八極拳だろうか。衛宮士郎の中段突きが、綺麗に九鬼英雄の胸へと吸い込まれた。

「もう1つ教えてやろうか。今朝の話は知ってるか？」

「え、ええ。衛宮士郎が矢による狙撃で子猫を助けたという件でしょう。それがどうしたというのです？」

「あの時、アイツは今と同じ制服姿だった。その上で言うぜ。アタイは、アイツがどこから弓と矢をだしたのかわからなかった」

——わからなかった？風魔の忍者であるあの女王蜂が、学生の武器と取り出しを、見逃した？

「な、怖えだろ？お前の大事なお嬢様は、そんなやつの近くにいるんだぜ？」

「……………」

なんと言葉を発せばいいのかわからないまま、衛宮士郎を見やる。倒れ伏す九鬼英雄を静かに見下ろすその鋭い瞳が、先程は頼もしくすら思えたその瞳が、急に冷たいものに思えてしまった——

九鬼英雄から見た川神のブラウニー

初めてその男を知った時は『野には我と同年代でそれなりの人材がいるものだ』と思った。

その男の自己評価を知った時は『難儀な男もいるものだ。民の上に立つ者として導いてやらねば』と思った。

その男を一子殿が慕っていると、それを男が自覚していると知った時は——ふざけるな、と思った。

「我が事ながら、酷い言われようだな。なんだか、九鬼英雄らしくない気もするが」

「ふん。撤回するつもりはないぞ」

決闘の翌日の昼休み。屋上でその男と会話をしていた。負けはしたが、心は自分でも驚くほどに凧いでいた。姉上の言う通り、時には愚直にぶつかってみることも必要だということか。

「貴様の事情は知らんし、我が踏み込むべきことではないのかしれん。が、これだけは言っておく。極端な自己否定は、貴様だけでなく貴様の周囲の人物もまた否定することだと心得ておけ」

「自己否定、か。否定するような自己が、そもそも俺にはあるのかね。だって『俺』は——『衛宮士郎』じゃないんだから」

「……………なんだと？」

どういふことだ、と問おうとして、報告書にあったある記述を思い

出した。

「確か貴様は、火災以前の記憶を失ったのだったか」

「ああ。まあ、そんなところだ」

我と視線を合わせようとしないまま、空を見つめたまま衛宮士郎が続ける。

「ぼんやりとした映像が浮かぶこともある。情報を参照することもできる。培った経験から得た技術を扱うことも。でもそれはあくまで『記録』であって、実感の伴う『記憶』じゃないんだよ」

こぼれ落ちたモノを悼むかのように。もうこれ以上失わないように。男が右手を強く握りしめた。

『衛宮士郎』という他人が書いた日記を読んでるようなもんだ。弓も、剣も、何もかも。この体でさえ、頭天边から足の先まで『俺』のものは一つもない。『俺』はある日突然『衛宮士郎』の体に入ったニセモノで、マガイモノで——誇れるものなんか、何一つないんだよ」

——ああ、いかん。

「……mれ」

「——なんだって?」

敗者が勝者に声を荒げることほど無様なものはない。しかし、抑えきれん!

「黙れと言ったのだこの大馬鹿者!!!」

突然の怒気に、衛宮士郎が面食らったように押し黙る。

「貴様の心情を理解できたとは言い難い。いや、真に共感できる者なぞ世界に1人もおらぬのかもしれない。だが敢えて言おう。貴様は、一子殿が人の能力だけを見ているなどと思うのか!？」

詰め寄って襟を掴む。九鬼としてあるまじき行いだが、我慢ができなかった。

「いや、そうじゃないが。人助けのことなら、あれは『衛宮士郎』ならそうするだろうってことをやってるだけだ。代償行為みたいなもので――」

「だとしても!!そうすると決めたのは、貴様の意思であろうが!?!その想いを、他ならぬ貴様が否定するのか!?!」

「――」

暫く、お互い黙ったまま立ち尽くす。一瞬とも、永遠とも思える静寂の後、衛宮士郎がポツリと呟いた。

「『決して、間違いなんかじゃないんだから――!』か。そんな簡単なことを、永い間忘れてたみたいだ。……ありがとう、英雄」

じつとその顔を見定める。今まで全く顔を合わせようとしなかったが、今度はしっかりと見つめ返してきた。

「一子殿を貶めるような発言は、今後許さんぞ」

「ああ、わかった。これから、真剣で生きてみるよ」

……ふん。どうやら、心配はなさそうだ。襟を掴んでいた手を放し、踵を返す。

「帰るぞ、あずみ！」

「はい！……あの、英雄様。よろしかったのですか？」

よろしかったかと問われれば、勿論良くはない。しかし――

「一子殿が見込んだ男が、あのままでよいわけがなからうが」

――そして幾らかの時間が過ぎ。

川神学園と天神館との学年別集団決闘において、義経たち源氏クローンが戦闘開始直後に登場した未来。

「オイオイオイ義経だってよ！テンション上がってきたぜヒヤッホウ！」

「自分知ってるぞ。源平合戦の英雄だな！」

「つつてもアレ女じゃなかったか？」

「うん、綺麗な髪してたね！」

「そだね。襲名制とかなのかな」

「シロ君？どうしたの？」

「ああ、いや。熟、英雄に縁があるもんだな、つて思つてな。……大和」

「士郎？」

「予定変更だ。『アーチャー』として、俺も本気でやる」

英雄とは、過去の偉人のみを指す言葉ではない。刮目せよ。今、錬鉄の英雄が動き出す。

川神百代から見た川神のブラウニー

——川神学園と天神館との東西交流戦、その戦場から少しばかり離れた場所。そこに、2人の男女が並んで立っていた。とはいっても、美しい夜景とは裏腹に、両者の間に甘い雰囲気は欠片もなかったが。

「源義経かー。いーなー強そうだなー戦いたいなー」

「口ではそう言っても、飛び出していかないようでも何よりだ」

「色々台無しにするような真似はしないさ。お前は私をなんだと思ってるんだ、京極」

「普段の言動を省みれば、ブレーキの付いていないトラック……いや、戦車あたりが妥当じゃないか?」

「こ、こいつ……真剣で言ってるやがる。」

「義経ちゃんにはすつつつつつごく興味あるんだけどな。弟分その2が折角やる気になってるんだ。今はそっち優先だな」

「弟分……その2ということ、衛宮君か。それは、私も興味がある」

さーて、シロ坊は何してるかな、つと。目を凝らすと、噂の男はパルクルルの要領で給水タンクの上に登っているところだった。

「まーた妙な動きしてるなー。昔からよくわからんやつだ」

「妙な動き、とは? 私には、軽快に動いていたようにしか見えなかった

が」

独り言に京極が首を傾げている。仕方ない、美少女が解説してやるか。

「私たちが凄い高さや速さで飛んだり跳ねたりしてるのは、体を『気』で強化してるからだっつてのは知ってるだろ？」

「ああ。川神が先ほど掌から出していたようなあれだな」

直前に行われた学年別対抗戦、3年生の部。そこで撃った『星殺し』のことだ。

「だな。うちのガクトがあれだけ鍛えてるのにそれなり以上の武士娘に勝てないのは、アイツが気に目覚めてないからだ。修行の成果が出て一定以上のレベルになると、本人は無意識の内に気が巡って、見た目の肉体以上の力が出せたりする」

クリスなんかは中々のレベルだ。もうすぐ気の開放もできるかもしれない。妹は……正直、まだまだだ。

「で、気の開放……『気』を任意で発動できるくらいなら、あんなの一口气で飛び上がれるくらいのはずなんだよな。それなのにシロ坊は小刻みに、手とかも使って登ってたろ？それが妙なんだ」

「なるほど。確かに君たちは、生身で時折人間離れした跳躍をしているな。なんなら空中で方向転換や加速すらやってみせたりする。その『気』とやらが任意で使えるほどの実力なら、それぐらいはできないとおかしい、というわけか」

京極が納得した顔で頷いている。というかこんな美少女捕まえて

人間離れしたとか失礼なこと言うんじゃない。

「うっせ。言つとくが、人間離れしたつて言うならお前の『言霊』も大概だからな？」

「しかし、例えば『気』が扱えてもそこまでできるほどの量がない、ということもあり得るのではないか？」

あ、スルーしやがったコイツ。

「それはないだろ。なんせ……あれだけのモノが撃てるんだから」

指示した先の給水塔の頂上で、赤い洋弓を構えるシロ坊。そこから次々と放たれていく矢の全てが、恐ろしい速度で闇夜を切り裂いて狙いを過たずに敵軍の兵士に命中していく。刃の付いていないレプリカとはいえ、あれだけの威力で打ち抜かれた生徒はそれだけでバタバタと倒れていった。

「これは……凄いな。えげつないほどの射程と弾速だ。矢で射るというよりは、最早砲による狙撃と言うべきだな」

京極が珍しく素直に感心していた。それは姉貴分として嬉しいんだが……なんかこう、複雑だ。

「加えて、武人ではない私にもはつきりと、放つ前から『当たる』と確信させるほどの正確性……これほどの弓兵が今まで知られていなかったとは、川神は面白い土地だ」

「本来『気』を自分の肉体以外に纏わせるっていうのは高等技術なんだよ。ずっと手にしている武器なら兎も角、自らの手を離れて飛んでいく矢なら猶更だ。京も同じことはできるだろうが、それなりに消耗す

るだろうし、そう何発も撃てるもんじゃない。それをあれだけバンバン撃ってるんだから、『気』が少ないとは言えないだろ？それに……」

「それに？」

「いや……なんでもない」

「ふむ……おっと、今度はあの位置から狙撃して銃口に矢を命中させるとは。見事だな」

何か言いたそうな顔はしていたが、京極はそれ以上追及してこなかった。正直、助かる。

——普通なら、矢に『気』を纏わせてもあんな威力にはならないはずなんだ。

出かかった言葉を口の中に止めて転がす。いや、正確にはできなくはない。数十秒かけてたつぷり気を籠めたり、矢の軌跡に合わせて気を放出し続けたりすれば同じようなことはできる。できるが、同じ威力であれだけの連射はできない。

正直自分の好みからは外れるが、弓術の達人と戦ったことも何度もある。今まで目にしてきたどの実力者よりも、シロ坊の矢は異質だった。

——まるで、矢そのものに気が染みわたっているかのような、異質な強化。

——まるで、衛宮士郎という男だけが全く別の理で動いているかのような、異質な戦闘能力。

『大将、討ち取ったわー!!』

……妹の元気な勝鬨が夜空に響く。どうやら、シロ坊の援護で敵の大將を倒したらしい。これで2年生の部も、川神学園全体としても勝利だ。

「以前書物で『敵の攻撃が届かない場所から、自分の攻撃だけを一方的に届かせることが最善の戦術だ』というような話を見かけたことがあるが……まさに、それを体現する活躍だったな」

「ああ……そうだな」

覗いていた双眼鏡を懐に仕舞いつつ京極が話しかけてきたが、気の抜けた返事しかできなかった。

「単純に敵兵の撃破数という意味でも、援護や貢献度という意味でも、今回最も活躍したのは衛宮君だろう。源義経とやらも気になるが……明日からは、衛宮士郎という存在を皆が認識し始めるはずだ。これからどうなるのか、楽しみだな」

「そうだな……」

「川神？どうした？」

「いや、なんでもない。帰るか」

頭を振ってから歩き出す。

——シロ坊。お前は、私の渴きを満たしてくれるのか？

弟分の魅せた思った以上の実力に、心の奥底で芽生えたそんな想いを無視しながら。

小島梅子から見た川神のブラウニー

——川神学園と天神館の東西交流戦後、衛宮家にて。

「それで、あの源義経は一体なんだったんだ？ 武士道プランとか言ってたけど」

じゅうじゅうと美味そうな音と、そして匂いを台所から漂わせながら士郎がこちらを振り返らないまま、背中越しに問うてきた。それだけでビールが進みそうになってしまいが……いかんいかん。仕事も終わってプライベート、家族の時間とはいえ教師が生徒の前で泥酔するわけにはいかんらかな。自重せねば。

「私にもわからん。学園長はどうかしらんが、少なくとも教師陣には知らされていなかった。……まあ、あの九鬼のことだからな。突然何をやらかしても不思議ではないが」

一気にグビグビとやりたいところだが、チビリと一口飲むだけで我慢する。士郎の料理ができる前に酒を消費してしまうのは勿体ない。うむ、自重だ自重。

「ふうん、梅ねえでも知らなかったんだ。本人は『本物だ』って言うってらしいけど、特に霊体ってわけじゃなかったんだよな。どういうことだろ」

思わずビールを吹き出しそうになるのを必死に堪える。入学した頃から全く言わなくなったのに、どうしていきなり『梅ねえ』なんて言い出すんだ!! 顔が赤いのは酔ってしまったせいだ。そういうことにしておこう、うむ。しかし……

「雰囲気が変わったな、士郎。少し明るくなったか？」

「うん、まあ。ちよつと、目が覚めたっていうか。ほら、お待たせしました、つと」

士郎が運んできた銀紙を開くと、中からふわりとコンソメのような蠱惑的な香りが立ち上がった。完璧な蒸し具合で中央に陣取る鮭と、出汁に浸されて柔らかくなった周囲の野菜。玉ねぎ、人参、しめじで栄養バランスも、彩りもいい。相変わらず、男子学生が作ったとは思えない出来だ。

「今日は鮭が安かったから、ホイル焼きにしてみたんだ。それじゃ、食べようか」

「いただきます」

箸を通してでもわかる、ふんわりと柔らかい鮭。玉ねぎと一緒に搥んで口の中に入れると、暖かく優しい味がいっぱいに広がった。これは……

「やはり変わったな士郎。以前よりも味が前を向いている、というか……士郎の味になった、という感じがするぞ」

私がそう言うと、士郎は一瞬キョトンとした顔をした後に——驚くほど、柔らかく笑ってみせた。

「凄いなあ、梅ねえは。わかるんだ、そういうの」

「当たり前だ、教師を舐めるな。ただまあ、お前にそういう顔をさせるのは、本来教師であり保護者である私の役目だった。そう思うと、自

分の不甲斐なさに内心忸怩たるものはあるがな」

今度は声を上げて笑う。……本当に、表情豊かになったな。

「それはまあ仕方ないかな。男同士の泥臭い友情、みたいな感じだったし。あ、そうだ。これ使う？わさびマヨネーズのソース」

「む、美味しいなこれは。例の九鬼英雄との決闘騒ぎか？あれは——」

なんでもない、和やかな家族の時間が過ぎていく。当たり前なの、けれど私はずっと求めていた時間が。

「——俺はもう、大丈夫だよ梅ねえ」

食後、後片付けも終わり2人で茶を飲んでいると、士郎がポツリとそう言った。

「俺はさ、極端に言えば、今までは『生きている』とは言えなかった。自分を殺して、ただ『衛宮士郎』のフリを必死にしているだけの——ロボットみたいに過ごしていただけだったんだ」

「……………」

「自分はニセモノなんだって。マガイモノが、自分の意思で行動しちゃいけないんだって、そう思ってた。馬鹿みたいだよな。贗作には価値がない、なんて思考は『衛宮士郎』からは程遠いことなのに」

……そうだ。この子は昔からそうだった。『衛宮士郎』とは、自分にとって英雄なんだと。自分がそう名乗ることなど烏滸がましいと、自分を押し殺して——必死に、理想の『衛宮士郎』を演じて生きてき

た。あの火災から目覚めた日から、ずっと。気にせず自分の人生を生きていられたらよかつたろう。いつそ、壊れてしまっていた方が楽だったかもしれない。でも、この子は自らの意思で『自分』を捨てた。それは、どんなに辛い日々だっただろう。それは、どれほど苦しい日々だっただろう。

「でも、こんな俺でも、慕ってくれる人がいるから。俺のままでもいいんだって言ってくれる人がいるから。だから、大丈夫だよ、梅ねえ。俺もこれから——頑張って生きてみようと思う」

「……………そうか」

私がそれだけ言うと、士郎もうん、とだけ返す。特に変わったところのない、今まで通りの風景。それでも、これからは何かが少しずつ変わっていくんだろう。それが少し寂しくもあり——それ以上に、嬉しかった。

川神鉄心から見た川神のブラウニー

「総代、終わりましたヨ！」

「おお、お疲れさん、ルーよ。皆もの。それで、どうじゃった？」

ルー、鍋島、ヒューム、クラウディオ……並ぶとやはり壮観じゃな。身が引き締まる思いがするわい。

「九鬼従者部隊立ち会いのもと、川神学園、天神館双方同時に確認しました。回収された矢は全て川神学園が用意したレプリカと同一のものデス。間違いありません！」

ヒュームとクラウディオの方を見やると、2人同時に頷いた。

「九鬼の名において、不正はなかったと保証しましょう」

「すまねえなあ。うちのやんちゃどものせいで、手間かけさせちまつてよ」

鍋島が頭を下げる。交流戦後、衛宮君が放った矢に対して、何らかの不正があつたんじゃないか、という申し立てが天神館の一部の学生から出た。そこまで気にすることではないんじゃないが、手間がかかったぶんは正式に謝罪せねばなるまい。立場があるというのは面倒くさいもんじゃ。

「ま、気持ちはわからんでもないからの。明らかに残弾とか補給とか無視して、景気よくバンバン撃ちよったしの。実際、回収された矢の数も、予め用意したのより多かつたんじゃない？」

「ハイ。しかしそうになると、総代の『顕現』と同じような『気の具現化』でスカ……。強さの壁を超えた者や、そうでなくとも気の扱いに長けた者はできなくもないですが。それでも短時間が精一杯のはず。今までカタチを残しているのは、驚異的です」

ルーがしきりに感心しておるが、それだけじゃないんじゃないか。儂が解説しようかと思っただが、ヒュームがそろそろ喋りたそうにしてるので我慢しておくか。

「甘いぞ、ルー。ここから……。この辺りまでが、あの妙な赤子の放った矢だ。よく見てみる。妙だとは思わんのか？」

ヒュームが地面に並べられた矢を指す。ルーは一瞬訝しげにしておっただが……。気づいたかの。

「これは……。もしま、全て『同じ矢』なのでスカ？」

「ああそうだ。木目や僅かな歪み、傷まで『全く同一』の矢が100本以上……。具現化したというよりは、複製したという方が正しいだろうよ」

「衛宮君は確か、弓も矢も事前に持ち込んでいなかったはずじゃからの。おそらく、椎名京あたりの矢から複製したんじゃない。ま、どちらにせよ自力で用意したもんなら問題無しじゃ。施設を壊さないなら、その場にあるものは何でも活用してもよい、武器を即席で作ってもよい、と予め言っているしの」

儂の言葉にその場にいる全員が頷く。よし、これでこの件は仕舞じゃな。

「コピペで負けたなんて聞いたらまーうちの奴らが騒ぎそうだな

……詳しいことは黙っておくか」

「元気で良いではありませんか。しかし、興味深いことをなさる方がいらつしやいますね。将来が楽しみです」

「ふん。興味深かろうが、所詮は赤子よ」

衛宮君か……彼も変わった、いや、元に戻ったみたいじゃし、これからが楽しみじゃの。

川神院に引き取られてから、初めて一子が友人を連れてきた時、門下生たちは皆大いに喜んだ。彼に感謝し、これからも仲良くしてやってくれと皆が言っていた。年齢に似合わず、礼儀正しい物静かな少年だった。

何度目かの訪問の際、一子にせがまれて彼が弓を引くことになった時は、修行僧たちがこぞって見物しにいった。そして――

一矢で感心した。二矢で魅せられた。そして――三矢で、羨望と驚愕の眼差しが彼を包んだ。

前者は、彼の腕に対して。後者は、年端も行かぬ子どもがそこまで境地に達するために、どのような経験をしたのか、どのような精神を有しているのか、ということに対して。……勘の良い者は、察していたのだろう。翌日から、彼への態度が腫物を扱うようなものになったのだから。

彼もそれをわかっていたのか、以降はあまり長居をしなくなった。それでもなお礼儀正しいまま振る舞う少年の背中に、声をかけてみたことがある。

『見事な腕じゃの。武道とは道を求めその先の境地に至ることだとするならば——お主は既に、ある種の境地に間違いなく至っておる』

階段を降りようとしていた少年が、ゆつくりと振り返った。その瞳は——驚くほどに、空虚。一体どんな人生を歩めば、この歳にしてこのような目ができるのか。

『……そんな大したもんじゃありません。あれは副産物のようなものです。俺が弓を引くのは、単に衛宮士郎ならばそうするだろうってだけの、真似事です。……俺自身は、からっぽだから』

『そうじゃの。別に弓でなくともよいのじゃろう。お主は既に会心に入る術を心得ておる。もっと言えば、そもそも何かを持つという行為が余分じゃ。毎日引こうが、数年ぶりに引こうが、お主は変わらず命中させるじゃろう』

儂がそう言うと、驚きで表情がほんの僅かだけ動く。ちーと、お節介を焼いておくかの。

『じゃがの、弓はなるべく引いておくとなええ。お主はまだまだ若いし、人生は長いんじゃ。今はまだ何も入っていないなくとも——その中身が満たされる時がきつとくる。その時、想いを込めて弓を引けるように、準備だけはしておくんじゃの』

『……そんな時が、くるんでしょうか』

『お主より何倍も生きとる爺が言うんじゃ、間違いないわい』

お主の中身を満たすのが、一子や百代であることを、儂も祈っておるよ。

あの時、敢えて口に出さなかつたあの言葉が、実を結びつつある。川神に生じつつある、若者たちの熱と波。それに揉まれて、衛宮君も一皮向けてくれるはずじゃ。爺としては、その隣に一子がおれば尚の事良い。

——若者たちの未来に幸あれ。

心から、そう思った。

武蔵坊弁慶から見た川神のブラウニー

直江大和のおかげで与一もなんとか出席し、無事に始まった私たちは源氏クローンの歓迎会。かなり大掛かりに開催してくれて、相応に盛り上がっていた。主も与一も楽しそうだ。

私たちの歓迎会なんだから、固まって行動するのはよくない、というところで皆ばらけてパーティーを楽しんでいる。主はずっと人の輪と会話の中心にいるし、不安だった与一もそれなりに上手く馴染めていくみたいだった。私は……川神水と、美味しいツマミまで用意してくれてるなら文句なんてあろうはずもない。また唐揚げをお一つパクリといただく。そこに川神水をグイッと。

「ん……美味し。下味がしつかり馴染んでるね」

一流の、とか。極上の、とか。そういう感じじゃない。家庭的な味なんだけれど、丁寧で美味しい味。ホツとするような味だ。なんだから、島の母さんの作ってくれた料理を思い出してしまった。

「こっちの肉も旨いぜー！食ってみろよ弁慶！」

風間翔一が勧めてくれた肉、ローストビーフを食べてみる。うわー、これも美味しい。わさびを横に付けてくれてるのがまた嬉しい。川神水に合う!!

ほかの料理は何があるかな、っと見渡してみる。レタスで一口サイズに包まれたサラダ。卵焼きに、ウインナー。あっちは魚介と、チーズと、野菜と。3種類の……カナツペっていうんだっけ。栄養バランスも、食べやすさも。冷めても美味しいところまでキッチンと考えられている。凄いな。

「んー!!どれもこれも全部美味しいねえ」

「そうだろそうだろ!!なんてったって今日は料理部に、クマちゃんともゆつちと士郎まで手伝ってくれてるからな!」

クマちゃん、ともゆつち、っていうのはあだ名だろうけど。士郎、っていう名前には聞き覚えがあった。

「その『士郎』って、衛宮士郎のこと?弓矢使ってた、東西交流戦の MVPの」

「そーそー。アイツ、昔から料理も得意なんだよ」

あつさりと肯定されてしまった。

我ながら理不尽だとわかつてはいるけれど。正直、衛宮士郎という男にはあまり良い感情は抱けていない。主の見せ場は取られちゃうし。与一の影は薄くなるし。いやでも、何か私にツマミでも作ってくれたら許しちゃうかも。これだけ美味しいんだし。

なんてことを考えてると、しつかしうめーなー、オーブンか?オーブンなのか?なんて風間翔一がぶつぶつ言っている背後から、なんと件の本人が何かを抱えて現れた。

「使ったのはフライパンだけだよ。弱火、余熱でじっくりと火を通すこと。肉をしつかり休ませること。この2つさえ気を付ければ、家庭でも同じように作れるさ。っと悪い、場所を空けてくれ」

そう言うと、私の目の前のテーブルにカセットコンロと鍋を置く。うん、鍋だ。1人用の水の中に昆布が浸ってる。一旦引っ込んで、追加で持ってきたのは……貝の刺身?

「……よし。弁慶、これは俺からの個人的な贈り物だ。義経や与一に

はまた別の物を用意したんだが、お前はこっちの方が喜ぶと思っ
てさ」

衛宮がカセットコンロの火を点けると、嗅ぎなれた香りがふわりと
立ち上がった。これ、もしかして……私の表情に気づいたのか、衛宮
が言う。

「そう、お前が飲んでいるのと同じ銘柄の川神水をたっぷり入れてあ
る。これでこの貝をしゃぶしゃぶにして食べてくれ。ホタテと、牡蠣
と、みる貝とつぶ貝。ポン酢醤油と、ネギともみじおろしを用意した。
メは下茹でしたそうめんを一口ずつ、貝の出汁が出た後に潜らせると
いい。ポン酢もいいし、塩とすだちもお勧めだ」

え、なに。ここ天国？私、いつの間にか天国に来ちゃった？思わず
がばつと抱き着いてしまった。

「犬とお呼びください！ 士郎様〜♪」

我ながら単純だと思うけど、うん。これは仕方ない。仕方ないつた
ら仕方ない。

「お、おい弁慶」

あら、モテそうな感じだったけど、意外と慣れてない？

「あー、ちよつと何してるのよ!? 士郎の犬ポジションは私よ!! ガルル
ルル」

「僕だっているんだぞー。ウェイウェイウェイー!」

鍋がいい感じになるまで引っ付いて楽しんでると、川神一子と榊原

小雪に引きはがされてしまった……ちよつと残念、かな？

歓迎会が大成功に終わって、帰り道。主と与一に渡したいものがあるからと、後から追いかけてきた土郎と一緒に帰る。片づけを手伝って、少し待ってから出発したから、もうすつかり夜だ。紋白主催の歓迎会だし、今日くらいは九鬼の人も許してくれるだろうけど。

海底トンネルに入る前。海沿いの開けた場所で、ここでいいかと土郎が背中に背負っていた大きな荷物を降ろす。武器だということだったから、広げて問題ない、あまり人に見られないここまで待っていたんだろう。

「まずは与一。俺が作った弓だ。気に入らなかつたら、インテリアとして部屋にでも飾るか、死蔵してくれてもかまわない」

「弓か……ここで開けると片づけが面倒そうだな。部屋でじっくり見させてもらうか」

弓兵同士通じるものがあるんだろうか。土郎は気にした様子もなく頷いていた。まあ、与一に弓や矢は予想通りといえば予想通り。じゃあ主には……？

主に目をやると、期待に満ちた顔でソワソワと待っていた。そしてハツとして元に戻る。んでまたソワソワする。楽しみだなあ、あ、でもあからさまに期待しちや駄目だ！でも楽しみだなあ、とかそんな感じ。あー、今日も主が可愛くて川神水が旨い！

「義経には、勿論刀だ」

あら、本当に刀？ただ、今度は気に入らなかつたら、とかは言わなかつた。

「ありがとう衛宮君！そ、その……開けてみてもいいだろうか」

「勿論。『義経の刀』だからな」

士郎の言葉を受けて、全身からわくわくした空気を醸し出しながら主が包みを開けていく。やけに古めかしい装飾の鞘を取り出し、そこから主が抜いたのは——まさしく、主の刀だった。

主が佩いている『薄緑』によく似ている。似ているが、どこか違う。それなのに——主にとても、とてもよく似合っていた。まるで、主の手にあることが当然だ、とでもいうように。

「わ、わああああ……!!え、衛宮君!!少し、振るってみてもいいだろうか!?!」

「ああ、義経の武、魅せてくれ」

「承知した!!」

言うが早い、主が跳び上がる。そして——本当に、美しいものを見た。

刀を振る度に、主の手に馴染んでいく。体捌きが、技が、ただの一閃が。恐ろしいほどに深化し、進化していく。まるで長い間苦楽を共にした相棒のように、主は士郎が渡した刀と一心同体になっていた。私も、与一も、声を失っていた。いや、声を出すことすら無粋に思えた。……そんな感動的な時間が終わる。主が残心を解くと、パチパチパチ、と拍手の音がした。

「凄いなあ。やっぱり英雄だよ、義経は。俺も、創った甲斐がある」

——ちよつと待て。今、コイツはなんて言った？

「衛宮君が、創った……？こんな、素晴らしい刀を……」

「はあ!?弓は兎も角、刀まで創ったってのか!？」

与一が信じられないといった様子で叫ぶ。無理もない、私も同じ思いだ。

「そうだね。言っちゃ悪いけど、この現代で、士郎みたいな、ハッキリ言って若造があれだけの刀を創れるとは思えない」

今まで黙して見ていた私が言うと、士郎はその通りだというように頷いた。

「まあ、そこは深く聞かないでくれると助かる。ただ……一から創り上げたわけじゃないんだ。俺は模倣しただけ。贋作なんだよ、その刀は」

「贋作……これが……？」

主が心底怪訝そうに首を傾げる。つい先ほどまで、あれだけ夢中になっていた刀だからこそ、信じられないんだろう。

「ああ。源義経——いや、牛若丸の佩刀、薄緑。その贋作さ」

……ひよつとして、私たちはとんでもない男と関わってしまったんだろうか。でもまあ。主が嬉しそうだからいつか。それに。退屈もしなさそうだ。そんな風に半ば現実逃避しながら、川神水をぐびつとやることにした。

宇佐美巨人から見た川神のブラウニー

——日曜日、午前7時の衛宮家。

「ね、眠い……日曜日の朝っぱらからはオジサンにはきついなあ……でも、悲しいけどこれお仕事なのよね」

わかつちやいるけどやめられない愚痴を言いながらインターホンを押すと、直ぐに音がしてガラガラと引き戸が開いた。現れたのは当然衛宮だ。

「本当に来たんですね。おはようございます、宇佐美先生」

「そりや来るよ、お仕事だもの。それに、オジサンはこういうことで生徒に嘘はつかないぜ？」

それはわかってますし、宇佐美先生のご事は信頼してますけど、と嬉しいことを言いながら衛宮が頬を搔く。

「俺の一日を知りたい、なんて人が本当にいるとは思ってなくて……特に面白くもないんですけど」

「むこうさんから伝えてくれって言われてるから言うけど、九鬼紋白からだよ。あのお嬢さん、スカウトが趣味なんだとき。噂くらいは聞いているだろ？」

俺がそう言うと、衛宮は目を丸くしていた。

「それって、素行調査みたいなものってこと？ 凄いな、そこまでやるんだ」

いや、それはお前が特別なんだろうけどさ。と言いたくなつたが黙っておいた。明かしていいとは言われていても、べらべら喋るものでもない。

「ここで長話するのもなんですし……とりあえず、朝飯食べましょうか。もうできてますんで、どうぞ」

お邪魔しますよ、と言いつつ衛宮の後ろを付いて行く。案内された居間の食卓には、既におかすが置かれていた。

「ご飯と味噌汁ついでできますんで、待つててください」

台所に消える衛宮。用意されていた座布団に有り難く座りつつぐるりと周囲を見渡す。小島先生に聞いてはいたが、しかしまあ殺風景な家だ。最低限の家具だけで、殆ど物が無い。……台所の周囲だけは何故かやたらと充実しているが。

私室も見られても特に気にしない質なのか、扉も全開のままだ。こちらも全くと言っていいほど物が無い。あるのはダンベルと、教科書だけが入った本棚。その上に貼つてあるのは、納豆小町のポスター？

「お前、この家に小島先生以外の女が上がったことあんの？」

「いや、ないですけど……なんですか急に。あ、納豆食べます？」

「おう、食べる食べる」

出てきたのは、予想通りというか松永納豆。聞けば、1人暮らしを始めた時からずっと定期購入しているらしい。女ができたら家に上げる前に剥がしておけよ、と言うべきか迷ったが。面白そうだから何も言わないことにした。

ご飯と味噌汁。鯖の塩焼きに目玉焼き。山盛りのキャベツに、松永納豆。ご機嫌な朝食をぱくつきながら聞いてみる。

「んで、この後どーすんのよ?」

「ランニングです。川沿いで一子と合流予定ですね。宇佐美先生も一緒に走りましょうか」

んげっ。

「シーロクーん!!」

体操服姿でタイヤを何個も引きながら川神一子が元気よく腕をブンブン振って走り寄ってくる。一瞬腕がそのまま尻尾に見えた気がした。勢いそのまま衛宮の胸に飛び込んで頬ずりしている。衛宮も衛宮で当然のように受け止めて頭を撫でていた。おーおー、お熱いこって。……これ、正直に報告したら九鬼どうなるのかねえ。

「おはよう、一子。今日も元気だなあ」

「アタシはいつだって元気よ!それより、シロ君も最近元気になったみたいで嬉しいわ!」

確かに、具体的に何がというわけじゃないが、衛宮は確実に変わった。頭が良いとはいえないが、川神はこういうところ鋭いんだよな。

「……うん、そうだな。色々あって、ちよつと前向きになったから。変わったってなら嬉しい。ありがとう、一子」

あーあー、抱きしめてよしよしなんてしちゃってー。川神がポーっ

てなってるよ。いつか刺されなきゃいいけどな、真剣で。

「川神さん、おはようー!」「おう、今日も仲良いなバツキヤロー!」「おはよう〜衛宮君」「2人とも、おはようございます!」

「おはようございます!!」

すれ違う人、近隣住民たちが次々に声を掛けてくる。川神院の娘として、川神のブラウニーとしての人徳だろう。結構な速さで走りながら、その全てに律儀に返事をしていく2人。

「宇佐美先生、大丈夫?」

ちらりと後ろから付いて行く俺の方を振り返り、そんなことを言う衛宮。

「そう思うんなら、ちったあ手加減してくれ。こちとら、そろそろ体力が心配な中年オジサン、だぞつと。小島先生のこと、満足、させられるか心配、なんだ」

息切れしながらなんとかそう返事すると、さいですか、とだけ言うてペースを上げる衛宮。あ、この野郎。

「ゴ、ゴクリ……アダルトな世界だわ」

川神、お前はまだ気にしなくていい……いいよな?衛宮、大丈夫だよな?

家に帰ってからは、庭で近接戦の鍛錬をする。無手と、どこから入

手したのか、対になっている白黒の双剣と。(刃引きがしてあるのを確認した) シャドーを見て、実際に素手同士で組手もして思うが、やはりそう才能がある訳じゃない。才だけでいうなら、同じ風間ファミリーのクリスに劣るだろう。俺自身の眼力がそこまでじゃないから、川神と比べてどうなのかはわからんが。

双剣も同じだ。ただ、こちらの方が圧倒的に手慣れている、扱いられている感じがした。身体に染み付いている、とても言うべきか。組手とはいえ、相対した時に感じたあの重圧。死線を乗り越え、覚悟を決め、実戦を経験した戦士が纏うあの空気。……なるほど、確かに。年齢を考えれば、不自然なことこの上ない。爺さん方が気にするものもわかる。

午後からはバイト。商店街で、手を怪我した喫茶店のマスターに代わって厨房に立つ。エプロンがあれだけ似合う男子高校生ってすごいよな。というか、元からいたバイトじゃなくて助っ人の衛宮が中心になって店が回っているのは何故なのか。

「いやー、あつという間にうちの味も覚えちゃったし、この店継いでみるかい？今なら娘がついてくるけど」

「あー、えっと、その。遠慮しておきます……」

ここでもか。何故なんだ。お前は18禁ゲームの主人公か何かなのか？

ランチタイムが終わった夕方。商店街で買い物をして帰ろうとすると、ここからが『川神のブラウニー』の本領発揮だった。

店内のエアコンの調子が悪いから見てくれないか。大型ごみの運び出しの手伝い。母親とはぐれた迷子。川沿いの清掃ボランティア。次々遭遇する日常のちよつとしたトラブルに、時間の許す限り付き合っていく。そして、その全てに嫌な顔1つしていない。なるほど、こりや人から好かれるわけだ。まあ、中にはいいように利用してやる

う、なんて思うやつもいるかもしれないが。

——そして夜。

『後は、日課の瞑想して、課題とかして寝るだけです。え、瞑想を、ですか？別にいいですけど……座ってるだけですよ？』

——なんて言ってたが。こりや見といてよかつたな。いや、むしろこれをこそ見るべきだった。

電気を消した部屋の中央で座禅を組み、目を閉じて沈黙している衛宮。そういうことに疎い俺が一見しただけでも、自分の世界に入っていると確信できるほどの集中力。その集中が広がり、世界が衛宮に塗りつぶされていくかのような緊張感。これこそが、きつと衛宮士郎が『異質』だと言われる所以なんだろう。

5分だったのか、10分だったのか。或いは一瞬だったのか、数時間だったのか。どれほどの時が流れたのかわからない緊張と静寂を破って、衛宮が音もなく立ち上がる。そして、構えた。

——足踏み。胴造り。弓構え。打起し。引分。会。離れ。残心。

射法八節と呼ばれるその所作が、この上なく美しく実行されていく。弓もない。矢もない。ただ構えているだけだというのに、俺は放つ前から『当たった』と、心の底からそう思ってしまった。

衛宮に礼を言つて、今度飯でも奢るから、と家を辞した帰り道。

「オジサン、さっきの『アレ』を文章で伝えきれない気がしないんだけど……どうしたもんかねえ」

思ったより厄介な問題に、頭を抱えることになった。真剣でどうしようか、これ……

井上準から見た川神のブラウニー

——ある日の校内ラジオにて。

『はい、それでは次のお便り。柿はパキツとしたやつが好き、さんから。いいですねー、個人で好みは別れるところでしょうが、俺は好きですよ』

『私はどっちも好きだなー。硬めのやつをパクパク食べるのもいいし、すごい柔らかいやつをスプーンで食べるのもいいよな』

『ああ、ジユクジユクのやつをスプーンで掬って食べる人とかいますよねー！エフツ、オフウツツ!!……ジユクジユクって言葉に拒否反応が……』

『ほんととブレないなお前……』

『えー、気を取り直してお便りの内容いきますよ。最近義経ちゃんがますます凛々しくなって尊みがつらいです。どうしたらいいですか？ですって』

『わかるうー!!私もつらい!!つらすぎて義経ちゃんの太ももナデナデしーたーいー!!』

『先輩も先輩でブレませんよね……』

『まあ本気は置いといて、だ。学園に来たばかりの頃より強くなってから、それが表情とか振る舞いにも表れてきてるんだろな。仕方ないさ』

『おや。歓迎会とかもあつたし、大分馴染んできてメンタルとか良くなってるんだろーな、とは思ってましたけど。武神から、或いは武人から見てもお強くなってるらしいっしょ？』

『ああ。動きや技のキレが明らかに良くなってるからな。例えるなら、レベル上限が10開放されて、同時にレベル自体も5上がったくらいは変わってる。しかも学園に来てからのこの短期間でこれだろ？多分まだ強くなるぞ』

『そう言われるとすごいですね。それじゃあ見惚れちゃうのも仕方ない！なんの力にもなれなくてごめんなさい！はい、それでは次のお便り——』

「あう……あうう……（もじもじ）」

教室に戻ってみたら、クラスの皆がチラチラ義経を見ていて、義経は顔を赤くしてもじもじしていた。うーん、あと5年若ければ。まあ、俺が気を遣うのも変というか、義経にとつちや有難迷惑かもしれない。特に何も言わず自分の席に座って、弁当を取り出す。

「いただきます。いやあ、早弁ならぬ遅弁ってのもいいもんだね。我慢した分余計に美味く感じるよ」

……それに、少し前まで飯を美味いと感じる心の余裕もなかったかな。

「ほ。意外と悪くなさそうな中身じゃの。もしかや自作しておるのか？」

不死川が声を掛けてくる。こういう、何気ないところ見ると、根は

素直なんだけどな。不死川っていう生まれの影響で損をしてる、とも言える。……ある意味、俺たちと同じか。

「そ。若やユキの弁当だって、俺が作ってるんだぜ」

あ、ユキがこっち来た。予想通りというかなんとか、俺の頭をぺちぺちしてくる。

「ハゲの料理は、士郎直伝なのだ。校内放送、お疲れ様」

「おう、ありがとうな。って人の頭をはたくのはやめなさいよ!!」

まあ、ユキなりの愛情表現なのはわかってるからそのまま弁当食うけど。食いにくいけど!!

「士郎、とはあの衛宮士郎か。確か、お主らは幼い頃からの友人じゃったの」

「そーそー。ユキが士郎の味に慣れちゃってたもんだからさー。苦勞したんだぜ?ユキの満足する弁当作るの」

いやもうホント大変だった。ユキは不味かったらハッキリ言う。そのおかげで『不味くはないけど満足はしてません』っていう微妙な表情をされるのって結構ダメージくるのよね。

「ふうむ……去年あやつが文化祭で淹れた紅茶も中々のものじゃったし、芸達者なやつじゃのー」

「ああ、家は思いつきり和風なのに、何故か紅茶はやたらと淹れるの上手いんだよな。本人は『ただの器用貧乏だ』って言ってたけど。……つと。ご馳走様でした」

「によほほ。よくわきまえている庶民ではないか。しかしまあ、あれなら不死川の従者にしてやってもよいぞ」

あ、そんなこと言うとは。

「えーい♪」

「によわあああ!!いきなり人を蹴り飛ばすでなーい!!」

ユキが不死川を廊下まで蹴り飛ばす。……あ、廊下を通りがかつた士郎が不死川をお姫様抱っこでキャッチした。それを見たユキがすぐに廊下に飛び出す。士郎と一緒に歩いてたのは、川神一子か。最近、前にも増して一緒にいるなあ。俺や若としては、ユキを応援してやりたいんだけどどうしたもんかね。

「井上君は……」

「うん？」

掛けられた声に振り返ると、いつの間にか義経が立っていた。あらま、ちよつと意外。

「井上君は、衛宮君を尊敬しているんだな」

「――」

一瞬、なんと返事をしようか詰まる。義経の瞳が真剣だったのと――何より、士郎について嘘はつきたくなかったから。

『ユキ!? 士郎には知らせるな、と……!!』

『ごめん、トーマ』

『ま、俺は言うか言わないか半々だと思ってたがね。どうする? 若』

『……そうだ、トーマ。いや、葵冬馬。お前は、どうしたいんだ』

『わ、私は………私は。助けて、欲しい………助けてください、士郎
………』

『任せろ、冬馬』

「——ああ、尊敬してるぜ。お人よしの馬鹿だの、偽善者だの言うやつもいるけどな。俺にとって、俺たちにとって。士郎は、間違いなく英雄ヒーローなんだよ」

「英雄……」

廊下で、ユキや川神、不死川と騒いでいる士郎を見る。……士郎は、最近明るく、前向きになった。その影響で、色々なことが少しずつ、少しずつ変わってきている。俺たちの人生の岐路があそこだったというのなら、士郎の人生の岐路はそう遠くないうちに来るんだろう。俺としては、ユキが幸せになってくれるなら嬉しいが。どうなるのかねえ……

川神の夏が、すぐそこまで迫っていた。

榊原小雪、川神一子から見た川神のブラウニー

——僕にとって、士郎はいつだってかっこいいヒーローだった。

僕が虐待されていた時、手を伸ばして助けしてくれたのは士郎だった。トーマや準の親のことで悩んでいた時、気づいてくれたのも士郎だった。他にも色々、小さい頃からいっぱい。いっぱい僕を助けてくれたんだ。

トーマや準みたいに、いつも一緒にいるわけじゃない。それに、僕は『何を考えてるのかわかりにくい』って皆からよく言われる。けど、士郎はいつだって気づいてくれる。僕が嬉しい時も。僕が悲しい時も。いつだったか、士郎に聞いてみたことがある。

『ねーねー士郎。士郎はどうしてそんなに、僕のことわかってくれるの？』

『桜——ユキと似てる子を識ってるから、かな。よく似てるよ』

『ふーん、そうなんだ』

士郎がサクラって名前を言った時、とっても優しそうな顔をして。なんだか胸がチクってした。病気かな？と思つてトーマと準に相談したら、笑いながら心配ないって言われちゃったけど。それから、士郎がサクラって子の話をするのはなかったら気にしてなかったけど——最近、また胸がチクチクしてる。

最近、士郎が明るくなつた。前は、小さい頃の僕みたいに、ずっと悩んでる顔をしてたけど、今はそうじゃない。色んな人に囲まれて、楽しそう。賑やかで嬉しそう。士郎が嬉しそう、僕も嬉しい。嬉しいのに——義経とか、心とか。それに、一子とかが士郎と一緒にいると、なんだか、胸がもよもよする。僕、どうかしちやっただのかな。

それで、またトーマと準に相談したら――

『それでしたら、士郎にユキとだけの時間を作ってもらうのはどうですか？ 例えば、そうですね。今度の土曜日、一緒に遊びに行こうと誘ってみる、というのでもいいかもしれませんね』

『そうだな。行くのはユキだけだから、俺や若は誘うの手伝わねーぞ。自分で、誘ってこい』

『――うん、行ってくるね！』

『……なあ、若』

『なんですか、準』

『上手くいくといいよな』

『……そうですね』

士郎と一緒に遊びに行く。想像するだけで、嬉しいな、楽しいな。どこにお出かけしようかな――

「士郎ー!!今度の土曜日、一緒に遊びに行こ!!」

――アタシにとって、シロ君はいつだって大切な家族だった。

アタシがまだ岡本一子で、施設にいた頃から。シロ君はずっと、大人みたいな子どもだった。子どもにとって、特に小学生にとっては、たった1学年上の子でも、すつごく大人に見える。そんな中で、シロ

君は——なんていうか、大人がそのまま子どもになったみたいに、静かで頼りがいのある人だった。

アタシはよくキャップと一緒に風間ファミリーの突撃担当だなんて言われてるけれど。それは、いつだってシロ君が後ろにいてくれたからだ。皆で遊びに行く時も。アタシが川神一子になって、お姉さまの妹になった時も。いつだって、シロ君が皆の後ろで支えてくれるから怖くなかった。アタシが、川神院の師範代を目指すって言った時だって——

『ねえ、シロ君。アタシ、師範代になれるかな？』

『……なれるさ、なんて無責任には言えないな』

『そう、よね。でも——』

『お姉さまの力になりたい、だろ？ いいじゃないか、それで。だって、誰かの為になりたいって思いが、間違いのほすはないんだから』

『……シロ君』

『それでも、どうしてもつらくなったら。自分に負けそうになったら、いつでも俺を頼ればいい。だって、兄貴は妹を守るもんなんだからな』

シロ君に妹って言われた時、凄く嬉しくて。でも、ちよつと残念って思っちゃう自分もいて。その時の気持ちは、いつの間にか忘れていたけれど。

最近、シロ君は明るくなった。今まで、アタシたちだけに見せてくれたあの優しい顔で、学校でもよく笑うようになって。色んな人がシロ君のことをカッコイイ、つて言つてて。胸が苦しくなつて——だから、お姉さまと大和に相談して。

『まあ、まずはそこからだよな』

『ああ。お前は前からずっと言ってたし……ガクトやモロロも、クリスやまゆまゆの前に誘うべき2人がいるでしょって言ってたしな。キャップは言わずもがなだ。反対するやつなんていないさ』

『だけど、今回俺は助けないぞ。自分で考えて——ワン子、お前が誘ってこい』

『——ええ!!行ってくるわ、勇往邁進よ!!』

『……姉さん』

『なんだー、弟?』

『上手くいくといいね』

『……そうだな。寂しいっちゃ寂しいが、そっちのほうが絶対いいさ』

川神一子、行きます!!

「シロ君!!今日の金曜集会、一緒に行きましょう!!」

——シロ君と、いつか本当の家族になれたらいいな。そんな気持ちは、まだお姉さまや大和には言えなかったけれど。

The snow melts his hear
t

榊原小雪から見た正義の味方

——土曜日、川神駅前。

「士郎ー!!お待たせー!!」

キキーツってブレーキ。士郎の前でピツタリ!

「ユキが足が速いのは知ってるけど、スピード出しすぎちゃいけないぞ。あと、スカートでそんなことしたら下着見えちゃうからやめておきなさい」

士郎がなんでか僕の方を見ないままそんなことを言った。

「んー?士郎になら、見られてもいいーよー?」

「ンンツ!!それでも、他の人もいるんだから外ではやめておきなさい。あと、はいこれ」

ポスって僕の頭に柔らかい何かがつた。取ってみたら、紫色の、帽子?

「まだまだ暑いし、今日はよく晴れてるからな。プレゼントだ。日射病とかには気を付けないとだぞ。ユキは肌が白いし、余計に心配になる」

僕の頭を優しく撫でてくれる士郎。……ああ、やっぱり。士郎がこうしてくれるのは嬉しいな。……あれ？さつき、プレゼントだ、って。

「プレゼント!? 士郎、これ僕にくれるの!？」

「お、おう。その為に買ったんだし」

「ありがとう士郎!!」

嬉しくて、つい思いつきりギューってしちゃう。士郎も、軽くだけ背中をポンポンってしてくれた。

「そんなに喜んでくれて嬉しいけど、荷物が潰れちゃうからそこまでな。それじゃあ、出発しようか」

「うん!! 今日はどこ行くの?」

「ああ、まずは——」

「わーい、お寿司屋さんだー」

「水族館です。お魚さん怖がっちゃうでしょ」

士郎が笑いながら言う。学校で先生とか先輩とかにした笑顔じゃなくて、僕たちに見せてくれてた本当の笑顔。最近、学校でもよくしてくれるようになった。それが嬉しくて、ちよつと寂しい。

「んー。でも、士郎なら大丈夫じゃなーい?」

「大丈夫って、何がさ」

例えば、えつと……さつき、水槽のこっち側に……あ、見つけた！

「あれ！ 準、じゃなくてタコさん。士郎なら、料理できるでしょ？」

「今サラッと酷いこと言ったなユキ。いやまあ、できなくはないけど」

おおー、やっぱりタコさんも料理できるんだ。

「じゃあ、あれは？ サメさん！」

「コバンザメだな。ユキ、あれ実はサメじゃなかったりする」

僕が指さしたサメさんを見て、そんなことを言う士郎。そうだったの!?

「大きく分けるとスズキの仲間で、白身魚で普通に美味しいらしい。昔、木でできた船で海を渡ってた頃は、船の底にくっついてるのを釣ってよく食べてたらしいぞ」

「そ、そうだったんだ……じゃあ、あの蛇さんは？」

「……ウツボな。あれは料理したことはある。結構旨かったな」

半分くらいはじょーだんで言ってみただけど。

「士郎だったら、本当にこの水族館のお魚全部料理できそうだねえ」

「いや、流石に全部は無理だろう。今日の弁当にもお魚入ってるから、それで我慢なさい」

士郎のお弁当!?

「士郎がお弁当作って持ってきてくれたの!? やったー!! ウェーイ
ウェーイ!!」

水族館を出て、海沿いのベンチで士郎と並んで座ってお弁当を開ける。久しぶりの士郎のお弁当だ!

「おおー……おにぎりとー、唐揚げとー、卵焼きとー……あ、鮭! プチ
トマトと、ポテトサラダ? 美味しそう! いただきまーす!」

準の作ってくれるお弁当も美味しいけれど、やっぱり士郎のが一番
美味しい。トーマも、準も。この前の歓迎会の時だって、士郎の料理
を食べた人は、みーんな魔法みたいに笑顔になるんだ。英雄が食べる
ものを作ってる人にだって負けないくらいに!

「士郎は、お料理を作る人になりたいの?」

気になって聞いてみたら、士郎はびっくりした顔をした。そんなに
変なこと聞いたかな?

「職業、かあ………考えたことなかったなあ」

「そうなんだ? 士郎はしっかりしてるから、トーマと準がお医者さん
になるって決めてるみたい、ゼーんぶ決めてるのかと思ってた」

僕がそう言うと、士郎は少し寂しそうな顔で、じっと海を眺めてた。
……胸が、少しズキリしてる。士郎はたまにこんな顔をするけど、
僕は好きじゃない。何もかも諦めてた、あの頃の僕の顔に似てるか
ら。

「……子どもの頃、俺は正義の味方になりたかったんだ」

士郎が、突然ぼつりと言った。

「……なりたかった、って。諦めちゃったの？」

「ああ。ヒーローは期間限定で、大人になると難しい、どころじゃなかった。俺はただのニセモノで。何もかもが足りなくて。それでも、正義の味方の真似事だけはしなくちゃいけないんだ、俺はそうしなくちゃいけないだって——最近まで、そう思ってた」

士郎は前を向いたまま、僕の方を見ようとしなない。

「でも、英雄に叱られてさ。ちゃんと俺として生きようって決めたのに——今まで、何もしてこなかったから、何も見ようとしてこなかったらさ。何をすればいいのか、何をしたいのか、自分でもわからないんだ。俺はずっと、空っぽだったから」

「——じゃあさ、一緒に探そう？」

「——え？」

士郎が、驚いてこっちを見る。その顔を、そつと両手で包んだ。士郎が、あの時僕にしてくれたみたいに、そつと。

「空っぽってことは、今からなんでも好きなものを入れられる、ってことでしょ？一緒に好きなものを探そうよ。……僕の中身は、士郎と、トーマと、準が埋めてくれたんだ。だから、今度は僕たちが士郎を助ける番だよ」

士郎は、ぼーぜんとしたまま僕の話聞いて——すっごく、すっごく綺麗な顔で、笑った。

「そっか、そうだよな……ありがとう、ユキ」

「う、うん……」

顔があつい。胸が、変な風にドキドキする。僕、どうしちゃったんだろう。でも、これだけは言わないと。

「それとね、士郎。士郎の夢は、もう叶ってるよ？」

「もう叶ってる？それってどういう……」

「……あの時、士郎は僕を助けてくれた。士郎がいなかったら、今の僕はいなかったんだよ。だから——あの時からずっと、士郎は僕にとって正義の味方なんだもん！」

士郎をギュッと抱きしめる。どれだけ言葉にしたって足りないこの想いが、少しでも士郎に伝わるように。

——あの時のことを思い出す。

首を絞められていたあの時。僕はすぐに気を失っちゃったから、きつと1秒もなかったのかもしれないけれど。

『だ、誰……？』

『正義の、味方だ』

僕を助けてくれた正義の味方の姿は、どれだけの時間が経ったつ

て。きっと僕が地獄の底に堕ちたって、ずっとずっと、忘れてたりしないんだから。

林沖から見たアーチャー

川崎市、通常『変態の橋』の上にて、それは突然始まった。日中であるのに、不自然なほど人気がない。橋の中央で待つのは、中華風の服に身を包んだ黒髪の美女。それに向かっていくのは、川神学園の制服姿の赤髪の青年。字面だけ見ればロマンチックな光景だが、両者に甘い空気など一切なかった。あるのは、張り詰めた緊張感のみだ。

「——君が、衛宮士郎か。手合わせ願いたい」

「名乗りもせずにいきなりなご挨拶だな。それが中華風なのか？」

目的の青年は、年齢に似つかわしくない口調でそう返してきた。なるほど、評判通り胆力はあるらしい。

「すまない。私は林沖。梁山泊百八星が1人、豹子頭林沖だ」

「だろうな。大和経由で西から上がってきて武人狩りをしているとは聞いていたが……俺には狙う価値なんてないと思うぞ」

「？」

肩を竦める衛宮士郎。無防備なようできて隙がない。正確には隙らしきものはあからさまにあるが、そこを突く気にはなれない。その年で、そういう手段をあつさりを取れるところが既に侮れない。内心での評価を一段上げておく。けれど、今日の目的はそうじゃない。

「謙遜はいい、歴戦の戦士のような風格だ。それに、今日は君を『狩る』ことじゃなくて『見定める』ことが目的なんだ」

「見定める？」

「そう——『M』なる人物の言う通り、衛宮士郎。汝に、地弧星湯隆の素質、有りや無しや！」

酷い怪我をさせるつもりはない。見極めたいのは鍛冶師としての素質だ。ただ、私は不器用だから——戦いで感じさせてもらう。なんの捻りもフェイントもない、正面からの真っ直ぐな突き。さあ、弓兵の彼はどうする？ 躲すか、あるいは無謀にも槍を取ろうとするか。だが、彼が採った行動はそのどちらでもなかった。

——ガキンツ!!

生身のそれとは明らかに異なる、金属同士がぶつかった鈍い衝撃音。黒と白で彩られ、対になった母国風の双剣が交差され、私の槍をしっかりと防いでいた。

「驚いた。君は弓兵じゃなかったのか？」

話しかけながら力を込める。こちらが若干押しつつも、なんとか拮抗している槍と双剣。臂力も中々のようだ。

「生憎と手癖が悪くてね。それに、弓兵とて時には剣を取ることもある。なに、そこらの剣士にひけはとらんさ」

……いつの間に関調が変わっていた。同時ににじみ出てくる、巖のような重圧感。傭兵としての経験と勘が告げている。彼は、相手にしたら厄介なタイプだ。タイプとはしては、あの女王蜂なんかに近いだろう。

「なら——その言葉、確かめさせてもらおう」

——ギンツ!!ギヤリギヤリ、ガツ!!

晴天の下、金属と金属がぶつかり合う音が断続的に響く。初撃から既に5分。流石に槍兵と弓兵の周囲にはそれなりの数のギヤラリーがいたが、皆遠巻きに見つめるだけで介入しようという者はいなかった。それどころか、警察等に通報する者もない。

彼らとて川神市民だ、日常茶飯事の決闘騒ぎにはなれている。それでも尚動けなかったのは——2人の戦いが、今まで目撃したどれよりも、本物を感じさせるものだったからだ。命のやりとりという、本物を。

突く。突く突く突く。払ってまた突く。

幾度かの槍と剣の交差の後に、払った槍先が黒剣を突き飛ばす。すかさずそこに追撃の突きを送るも、構え直された手には既に再び先程突き飛ばしたはずの剣が収まっている。

「これで、28っ……いい加減しつこいっ!」

「しつこいのは君も同じだろう。いい加減諦めて帰ってくれないか? 愛が重い女は嫌われるぞ」

「な、何が愛なんだっ!」

思わず僅かに距離をとって乱れた呼吸を整える。落ち着け、落ち着くんだぞ林冲。

「それにしても……もしま、その剣は先程から突き飛ばされるたびに

作り直しているのか？」

私がそうこぼすと、衛宮士郎は感心したというように口笛を吹いた。

「ほう。初見の者は大体『剣を引き寄せている』と推測するものだがね。どうしてそう——いや、湯隆の素質がなどと言っていたな。何処の誰かは知らんが、Mとやらも余計なことをする」

頭の回転も速いらしい。本格的な見極めはまた次にするとしても、有能な人物なのは間違いないさそうだ。

「とりあえず、君を捕らえてMとやらの情報を喋ってもらおうとするか」

い、意外と好戦的だ!?!と、とりあえず、あんまり怪我はさせたくないけど武器より本体を狙って……あれ? 構えが……手に現れたのは——私の槍!?!

「言つたらう、手癖が悪いとな。そら、こんなのはどうだ?」

「つつ——!?!」

正直、練度はそれほど高くない。槍も扱えるというだけで、使いこなせるというわけではないんだろう。それでも対処が遅れてしまったのは、迫ってくる槍が寸分変わらず今私が持っているはずの槍で、その動きが私が積み上げてきた槍術にあまりにも似ていたからだ。

ぐちゃぐちゃに乱された思考を無理やり纏めつつ飛び退って大幅に距離を取る。よし、十分だ。このまま逃げ——

「——悪いが、私は『アーチャー』なんだ。そこは、私の距離だぞ?」

ぞわり、と肌が粟立つ。なんだあの、異様な『気』を放つ捻れた剣は。本能が全力で警告を発している。弓の腕がどうか、気の大きさとかそういう問題じゃない。存在そのものの格が違うと見たただけでわかってしまう。

「悪いな、剣は飛ぶものだ！」

魔弾が放たれる。出し惜しみなんかしない、できない。全身の力と、目を総動員して衝撃に備える。

「——あ。ああああアアっあああっ!!」

音速は超えていただろうか。腕の筋肉が壊れていくのを自覚しつつ、それでもなお全力で受け流す。なんとかしのいだ、と思ったところで。

「——壊れた幻想」
ブローケン・ファンタズム

そんな響きを最後に耳にして、私の意識は途切れた。

師岡卓也から見た主人公

——師岡卓也にとって、衛宮士郎は主人公のような存在だった。

ぶつきらぼう、無愛想。でも優しくて、気がつけば誰かの手助けをしている。中学どころか小学生の頃から、士郎に好意を抱く女の子は多かった。

京以上の弓の才能、成熟した精神。機械いじりもできて、それでいて料理上手で家事全般も。どこのエロゲの主人公なんだって言いたくなるスペックだ。世界が違えば、きっとハーレムなんかも作れたんじゃないかと言いたくなる。

——風間ファミリーのお荷物。金魚の糞。

そんな評判を耳にしてしまって、色々と病んでしまったこともある僕が、ファミリーの仲間じゃない士郎にコンプレックスを刺激されずに友だち付き合いを続けてこれた理由は、あの光景を見たからだ。

——後にも先にもあれだけだった。何も映してない、本当の空っぽな瞳を見たのは。

「ロー！おい、モロロ！大丈夫か？」

意識が現実に戻される。気がつくのと、モモ先輩が僕の肩を揺すっていた。

「え、あ、うん。ごめん、ちよっとぼーっとしてて。それで、どうなったって？」

「どうもこうも、林沖ちゃんは相変わらず何言われてもだんまりだ。

他の連中が奪い返しに来ること考えて、じじいもルー師範代も気を張ってるが……まあ、林沖ちゃん自体は暫く戦えないだろ。どうやったのかはしんないけど、シロ坊も女の子にえっぐいことすんなー」

モモ先輩が士郎を見やると、本人はあくまでファミリィじゃないからってことで、部屋の隅で腕を組んで壁にもたれかかっていた。滅茶苦茶気障なポーズなのに、なんだか絵になるのが凄い。しかもなんか今日はいつも自然なままにしてる髪をかきあげてるからワイルドだし。

「そうは言われてもな。罪のない川神市民を組織ぐるみで暴行して回ってる、海外の現役傭兵……いや、犯罪者集団相手に手心を期待されても困る」

「そうだけどさー。美少女はもうちよつと優しく扱えよ?」

「承知した。貴女と戦うことがあったら、もっと強力なのを撃ち込むことにするさ」

「いやなんでさ!?!こんな超絶美少女に対してその言い草はなんでさ!?!」

モモ先輩相手によく言うなあ。肩をすくめる仕草までいちいちカッコいいのがなんか悔しい。それに……

「士郎、なんか口調変わった?」

あ、セリフ京に取られた。

「変わった、というか変えてるんだ。意識を戦闘用に切り替えるためのスイッチみたいなものかな。まあ、これも『エミヤシロウ』だから

受け入れてくれると助かる。……そうだモロ、調べてほしいことがあるんだが」

「え、僕？梁山泊にハッキングしかける、とか言われても難しいよ？」

僕は——僕は他の皆と違って、なんの取り柄もないただの一般人なんだから。

「そうじゃない。史進、楊志、湯隆——水滸伝におけるこの3人について、できる限りの情報を調べてほしい。生い立ちから死に際まで。逸話や弱点、一般的に浸透しているなら、後世の創作によって付け足されたフィクションまで。そういう情報が、最後の最後で勝敗を分けることもある——頼んだぞ、モロ」

僕と目を合わせて、真剣な眼差しで頼んでくる士郎。……かなわないなあ。昔から、どんなに自分と比べて惨めな気持ちになったって——士郎のことは、全然嫌いになれないんだから。

「わかったよ。任せておいて」

「史進、楊志……先程の林冲と合わせて、自分でも名前を聞いたことがあるくらいに梁山泊の豪傑だよな。最後の湯隆というのもそうなのか？」

「ええ、その通りですクリスさん。梁山泊第八十八位の好漢で、地弧星の生まれ変わり。渾名は金銭豹子。梁山泊の鍛冶担当で、英雄たちの様々な武器を創り出し貢献したと言われる職人です」

「ふおおおお……なんか難しくくてカッコイイ会話してるわ……」

へえー、そうなんだ。

「で、なんで鍛冶師なんだ士郎？俺様たちの耳にや入ってねえが、そういうかわいこちゃんも川神に来てんのか？」

ガクト、気になるのはやっぱりそこなんだね……らしいけどさ。

「いや、件の林冲によると、俺にはその湯隆の素質がある、と指摘した奴がいるらしい。スカウトするための人材を必要以上に傷つけるわけにもいかないから手加減されたおかげで勝てたというのもあるんだ」

「は!?!あんな年上美人だらけの職場にスカウトされたってのか!?!ズリいぞちつくしよー!!」

ガクト、気になるのはやっぱりそこなんだね……らしいけどさ。らしいけどさ!!

「あーまあシロ坊ならびったりっちゃびったりだろうなあ。わかるわかる」

うんうん頷くモモ先輩。僕は士郎が鍛冶してるだなんて話聞いたことないんだけど。

「ワン子はなにか知ってる？」

「ううん、そんな話初めて聞いたわ」

そうなんだ。モモ先輩、何か知ってるのかな。

「士郎が梁山泊に入ったら……ハーレム間違いなしだろうなあ……」

あ、大和がなんか言ってる。けどさあ。

「いやなんですか。それにだな——」

「『『『『大和にだけは言われたくない』』』』』」

流石ファミリー（＋１）。息ピッタリだね！

クリステイアーネ・フリードリヒから見た鍊鉄の英雄

——自分にとって、衛宮士郎という人はまさに「義の人」だった。

困っている人を見過ごせない。評議会議長だったか。その最上先輩の頼みで学園中の備品を直して回り。自己鍛錬も怠らず、空いた時間で街で人助けをして回る。家事も得意で、特に料理は絶品だった。あのマルさんが「特に問題はありません。褒めてやってもいいくらいです」と父様に報告したそうだから凄い人だ。うん、凄い人なのは間違いないんだけど……

「なあ、大和。自分の目が疲れてるのかな。衛宮殿の手から、どんどん矢が突然出てきているように見えるんだが」

「安心しろ、クリス。俺にもそう見えてるから」

川神城が出現し、マープルたちの狙いが明らかになってからの作戦会議。攻城と防衛を同時にこなさなくてはならない方針が決定すると、衛宮殿が『なら、防衛戦の武器の用意は任せろ』と言い出した。直後、突然その掌から青白い光が出たと思っただら……いつの間にか、矢が存在していた。わけがわからない。

「んー、士郎。もうちょっと長いのも欲しい」

「ん、そうか。……これくらいか？」

「そうそう、それくらいで。数は……かなりの遠距離狙撃用だし、100もあつたら十分じゃないかな」

「了解した。鏑矢なんてのはいるか？」

「あー、少しあってもいいかもね。乱戦になるだろうし、意思疎通に使えるかも」

衛宮殿と京が打ち合わせをしている。……京がファミリー以外の男とこれだけ気安く喋るのは初めて見た。まあ、半分ゲストメンバーみたいなものだったと聞いたし、同じ弓兵同士話が合うんだろう。目の前で矢がポンポン出てくる光景は心臓に悪いけど。

「では、武具の用意は衛宮殿に任せよう。次は敵戦力だ。梁山泊は林冲が衛宮殿によって、史進がルー先生によって倒されたという話だったが――」

軍師である大和、紋白たちと相談しながら戦力を割り振り、計画を練っていく。この戦、絶対に勝つ！

「――そして義経、弁慶、与一の源氏軍だ。まず義経だが」

「あ、あの！義経さんのお相手は私が！」

「いや、俺が行こう」

まゆっちの言葉を遮って声を上げた衛宮殿に皆の視線が集まる。チラリと横目で軍師を見ると、大和も困惑気味だった。

「士郎が？でも、それは……」

正直、厳しいだろう。士気を下げる恐れがあるからと、大和が飲み込んだ言葉を心の中で続ける。衛宮殿は弓兵だ。接近戦ができないとは言わないし、ひよつとしたら自分よりも上かもしれない。それでも、義経が相手では分が悪い。

「士郎……大丈夫？それなら、僕も一緒に……」

榊原小雪が心配そうに声をかける。衛宮殿は、その頭にポン、と手を置いて――

「大丈夫さ。黛も、義経より弁慶の方が相性が良いだろう。片付いたら助けにきてもらえばいい。それぐらいの時間は稼げるさ。ユキは、冬馬や準のところへ行つてやつてくれ」

とても綺麗な笑顔だった。女生徒の中にも、ちよつと顔を赤らめている者がいる。

「うん……うん！トーマと準は僕に任せて！」

「……わかった。潜入の件は俺に任せろ。士郎も、時間稼ぎ頼んだぜ」

「ああ。ところで大和、1つ質問していいか？」

なんだ？と大和が首を傾げたところで飛び出したのは、予想外の言葉だった。

「時間を稼ぐとは言ったが――別に、義経を倒してしまってもかまわないんだろう？」

一瞬の静寂。誰もが呆然とした後に、最初に笑顔に戻ったのはやはりというか大和だった。

「ああ！ガツンとやつてくれ、士郎！」

「了解。せいぜい、期待に応えんとするさ」

仲良いんだなあ、この2人。……自分も、ちよつとカツコイイと思つてしまつたのは内緒だ。

「よし、できた。一子は——自分の愛用の武器の方がいいかもしれな
いけど、他の薙刀使う人に渡してやつてくれ」

「ん、なにになに？」

そう言いながら衛宮殿が犬に渡したのは、各所に施された龍の装飾
が見事な、年月を感じさせ重厚な朱塗りの薙刀。刃引きはしてある
ようだが、これは——

「セイリユウエゲツナイトウ！」

「青龍偃月刀だっ!!」

「あうあう」

大和と京の突っ込みが被る。自分が使つてる武器のことくらい勉
強したらどうだ、犬。

「しかし、見事なものだな……なんというか、オーラを感じる。確か中
国の関羽が使つていた武器だったか？」

「ああ。というか、その関羽が使つてたものの贋作だ。刃引きはして
あるけどな」

自分の言葉に、そんなこと軽く返してくる衛宮殿。……まで、今な
んと言つた？ 関羽が使つていた武器の贋作？ じゃあ、なんかオーラつ
ぽいものを感じるのはいのせいじゃなかったりするの？ その、床

に転がってる綺麗すぎる剣も？怖いけど、試しに拾ってみる。

「そ、そうか。じゃあこっちの剣も有名なやつの贋作だったりするの
か？」

「ああ。そっちは不毀デュランダルの絶世だな」

「そうか。デュランダル……デュランダルう!？」

ちよつと待て！自分でも知ってるくらいの伝説の武器じゃないか
！それが——どう見ても大量生産されてるんだが!？」

「と言つても、ランクはCまで下がってるし、概念強度も殆どないガワ
だけだけどな。ただ、不毀属性だけは付けたから、大ダメージで無理
やりとかじゃない限り壊れたりしないから安心して使ってくれ。あ、
もちろん刃引きはしてある」

「あ、危なくはないのか!？というか、なんでそんなものがポンポン出せ
るんだ!？」

「大丈夫さ。真価を發揮できるのは俺か……ローランか、ヘクトール。
それとマンドリカルドくらいだ。……マガイモノでも、一応俺も『鍊
鉄の英雄』だからな。これぐらいはさせてくれ」

え、ええ……そんな英雄の名前を気軽に呼んでもどうしろと。
そ、そうだ軍師だ！こういうときこそ軍師に相談だ！

「や、大和……」

横を向くと、大和が諦めろという笑顔で首を振っていた。や、やま
とお……

……とりあえず、この武器を部隊にどういうふうに振り分けるか考
えよう、うん。

クラウディオ・ネエロから見た衛宮少年

——思えば、初めて会った時から不思議な少年でしたね。

ある日突然最上幽斎に連れて来られたのは、彼の娘の友人であるという赤毛の少年。一時的でいいから従者服を貸してあげてほしいと言われ、仮にとはいえ九鬼の仕事着に袖を通す資格があるかどうか見極めることになったのがきっかけだった。

『これは……中々ですね。貴方はまだ川神学園の2年生でしたね。その歳でこれだけできれば十分です。どうですか？卒業されたら従者部隊として就職してみるの。紅茶の淹れ方、お教えしますよ』

『クラウ爺がそこまで言うほどですか？私も………美味しい』

『よかったらどうぞ。川神のブラウニーが作ったブラウニーです』

『くっ……っ！ふ、ふふ』

初めて使う茶葉や茶器で、合格と言える味の紅茶を淹れた腕。九鬼の基準ではまだまだ甘いものの、従者として基本的なところは抑えた立ち居振る舞い。初対面の李を笑わせるジョークのセンス。そして——多くの死線を乗り越えた者のみが纏うことできる、独特の空気。

『いきなりのことにも動じない度胸もあるようですね。以前、どこかで従者の経験でもっ…』

『執事の真似事をしたことがあるだけです。フィンランドの人でしたから、本場の、というわけじゃありません。ただまあ……地上で

最も優美なハイエナ、つて言われるくらいに癖が強い家でしたから。トラブルとか、突然のイベントとか、緊急事態とかには慣れてます』

肩を竦めながらそう語ったが、後ほど調べたところ彼に海外への渡航経験はなかった。九鬼の情報網を駆使して調査しても、彼が述べたような、従者を必要とするような家と接触した様子もなし。かといって、嘘をついていた風でもなかった。

——そして極めつけが、あの刀。

いくら義経たちに直接手渡された贈り物だとしても、何の検査もなしに九鬼に持ち込むわけにはいかない。それが武器となれば尚更。当然のことながら、一度預かってありとあらゆるチェックが行われる。

『どうですか、マープル』

『特に変な仕掛けだのなんだのはなかったよ。正真正銘、ただの太刀だ。……あたしでも感じ取れるくらいの気を放ってる太刀を、ただのとは表現したくないけどね』

『……彼は、この太刀を薄緑と言ったとか。源義経の佩刀だ、と』

『ああ、その件も調べたさ。義経に九鬼が与えたあの刀は、あたしが星の図書館としてのプライドを懸けてあらゆる記録、伝承、現存する刀を調べ上げ、源義経の刀として相応しい逸品を現代最高の刀匠に打たせたもんだ。癪なのは、そんなあたしが一見して認めちまうほどに、あの刀が薄緑そのものだ、つてことさ』

正直驚いた。あのマープルが、若者を認めるようなことを言うとは。

『だからこそ、あたしやこれを義経に渡すべきじゃないと思うがね。材質も、技術も、経た年月でさえもがまさしく本物の薄緑なんだよ、これは。まるで、鎌倉時代のそれをそのまま現代に持ってきたみたいだね。もしこれを創ったのが本当にあの小僧だつていうのなら——お人好しの妖精なんかじゃない、得体の知れない化け物さ。警戒しとくに越したことはないよ』

——そんな、マールが『化け物』と称した少年が、今敵として弓を構えている。

椎名京と並んで鋭くこちらを見据えるその眼光は、猛禽類さながら。感じるのは、恐らくまだこの場にいる誰も見たことがない、彼の本気。

直後、椎名京の矢が放たれた。

「人質がないポイントを狙って撃ってくるのはお見事。ですが、城の上空は我が糸の結界内ですので……一本の矢たりとも通すわけにはいきませんな」

椎名京の矢は爆発物を切断して始末する。天神館との戦いで拝見した貴方の矢は中々の威力でしたが。さて、私の結界を突破できますか？ などという浅はかな余裕は

——次の瞬間、文字通りズタズタに引きちぎられた。

「なっ——!!」

張り巡らせた糸から伝わってきた予想外な感触に思わず声を上げてよろけてしまう。何が、起こった？ 慌てて糸を手繰るも——上空に伸ばした糸の大半が切断されて使い物にならなくなっている。それ

も殆ど同時に、広範囲が捻じ切られるような感触だった。

直後に、重い着弾音。そして——爆発音と、配下の従者たちの悲鳴。こちらも爆発する矢ですか。

「どうしました？貴方らしくもない。次はしっかりとお願いしますよ」

「……わかっています」

桐山に返事をしつつ、今度は入念に、先ほどより強く糸を張り巡らせる。車を切断し、大型重機を拘束するほどの強度で強固な結界を作り上げる。

『——カラドボルグⅡ偽・螺旋剣！』

モニター越しに視認した、奇妙な螺旋状に捻じれた矢。いや、アレは矢ではなく——剣？……どちらでもいい。破壊が難しいのならば、逸らすか受け止めるか。糸を束ねて誰もいない場所に誘導するか——

——しかし、その矢は触れることすら叶わない。

矢が接近すると同時に、周囲の糸が一斉にズタズタに切断されていく。まるで、矢が進むと同時に空間そのものを切り裂いているかのよう。その上で、一射が戦車砲の如き威力。さらには、着弾後爆発する。お手上げだ。

「……申し訳ありません、前言を撤回致します。私では、アレを止められない」

「なんと!?!」

「ははっ、いいではないか！少しはやる奴がいるではないか。まあ、俺には及ばんがな！」

桐山の驚愕、項羽の評価、マーブルの沈黙。反応は様々。そして――

『……衛宮、君……』

モニター越し、沈痛な表情で迫り来る敵を見つめる義経。
英雄同士の戦いの火蓋が、切られようとしていた。

源義経から見た赤い弓兵1

——衛宮君と接して、語らってみて。義経と似ているな、と思った。

純粹すぎて騙されやすそうとよく言われる。負の感情がなさそうだから、怒っているところが想像できない、とも。実際、弁慶にはよくらかわれているし、心の底から怒ったことはまだないかもしれない。でも、そういう感情が全く無いかと言われればそうでもなくて。それは、主に自分に対してのものだったりする。

義経は、英雄のクローンだ。英雄『源義経』のクローンとして、その名を名乗るに相応しい英雄でありたい。でも、まだまだ足りなくて。至らない自分が申し訳なくて。そういう時は、自分を責めて悩んでしまったりもする。

きつと、衛宮君もそうなんだろう。まだ知り合って間もないけれど、衛宮君が人に負の感情を向けるところを見たことがない。1度だけ見てしまった衛宮君の怒りは、どこまでも自分に対してのものだった。

『——ついて来れるか、か。追いかけるどころか、その背中さえ見えてるかどうか。ガワだけ真似たってどうしようもない。俺は……英雄なんかじゃ、ない』

薄緑を貰ったお礼を改めて言おうと、休日を訪ねた衛宮家の庭。汗だくで膝を付きながら、心の底から絞り出した叫び。その後も、只管に双剣を振るい続けたその姿。人から見たら、いや、もしかしたら本人からも無様とすら思えるかもしれないその姿を——綺麗だな、と思ったことを覚えている。

目指す人がいて。至るべき場所があつて。そこに辿り着けない自分を不甲斐なく思いながらも、それでも前に進むその姿に。似ている

な、なんて思ったんだ。

……その衛宮君が、明確な敵意をその瞳に宿して義経の前に立っている。九鬼から貰った薄緑の鞘が割れてしまいそうなほど、握る手に入力が入るのが自分でもわかってしまった。

「今日は俺が渡した薄緑は持っていないんだな、義経」

「義経には……義経には、その資格はない。けれど、親代わりであるマープルの命令だから……戦うのが、義経のすべきことだ」

義経がそう言うのと、衛宮君はフツと笑った。衛宮君の笑顔は、いつも柔らかかったけれど。……あんな、冷ややかな笑みは初めてだ。

「義経らしい生真面目さだな。それはとても好ましいが——生憎と、こっちは手心を加えるつもりはないし、その余裕もないぞ？」

即座にほぼ同時に弓から放たれる3連射。その全てが砲撃と見紛うほどの威力を誇る。

「ふっ!!」

1振り1振りにしつかり気を載せて矢を切り伏せる。叩き落とすことはできたが、それでも腕に衝撃が残る。無造作に、と言いたくなるほどの速射でこの威力。間違いなく、与一に匹敵する射手だ。

「おっしやあ！任せませ、士郎！」

「ああ、任された。行って来い、キャップ！」

風間君たちが侵入を開始する。本当なら、それを少しでも食い止め

るのが義経の役割だ。でも、初めての我儘を、心の中で叫ぼう。義経は、衛宮君と戦いたい——！

「はあっ!!」

一息で距離を詰め、衛宮君に向けて真正面から刀を振り下ろす。正中線をなぞる一撃は、弓に変わって突然現れた、中華風の双剣の交差に受け止められた。

「これだけ近くで、一瞬で攻撃しても武器を取り出す予備動作がわからない。怖いな、衛宮君は」

「それなら、それらしい顔をしてから言ってくれ。俺には、ちつとも怖がっているようには見えないぞ?」

……こんな状況なのに、何故だか思わずふふつと笑ってしまった。それでも、お互い一切気は緩めない。語源とはちよつと違うけど、鎬を削るように双剣と押し合う刀に力を込めていく。衛宮君の腕が、僅かに下がった。

「……衛宮君は強いな。武人としても、心の在り方も。でも——義経は英雄だ。義経の方が、もっと強い」

戦場は、少しずつ城内部への入り口に近づきつつあった。城門から内側、本丸へと辿り着くまでに何重にも用意された塀と塀を、時には植えてある木の幹に水平に着地しては、衛宮君に向かって跳ね回る。

「ええい、相変わらず無茶苦茶だな君等は! キン肉マンでもないのに足場のない空中で方向転換したり、剩え加速するんじゃない! ——ぐっ!」

すれ違いざまに斬りつけた一撃は右手の剣で受けられたが、勢いままでは殺せずに衛宮君が吹き飛ばされる。好機と見るも、振り返って加速しようとした時には、既に空中で、それも吹き飛ばされながらも弓と矢を構える衛宮君がいた。溜めを作る一瞬の隙について放たれる矢。流石に最初の戦車砲のような威力はないけれど、受けて無傷で済むものでもない。矢を叩き落とした時には、衛宮君はもう立ち上がって再び双剣を構えている。こんなことが、戦いが始まってから十数度も繰り返されていた。

「先程の剣で、17。いや、18だろうか？何回消えてもまた現れるのは凄しいし、義経にはどんな仕組みかはわからないが、何も消耗しない、なんてことはないはずだ」

トン、トンとその場で軽く跳ねながら言う。義経は無傷。対して衛宮君は義経の攻撃を辛うじて凌いではいるけれど——それなりの力を含めた斬撃をずっとほぼ片手で受けているし、先程みたいに受けきり飛ばされることもあった。見た目に大きな傷はなくとも、それなりに消耗しているはずだ。

「……………」

衛宮君は、無言。表情も、動かない。速さは、義経がいくつも上。力も、義経の方が少し上だ。

「何も策がないなら、このままなら義経の勝ちだ。時間稼ぎが目的ならそれでもいいけれど——城から引き離されないように、入り口近くまで押し込ませてもらう！」

頭为天辺から、足の指の先まで全身に気を巡らせる。思いっきり踏み込んで正面から斬り伏せる。衛宮君は、これまでと同じように双剣

を交差させて受け止める。けれど、違和感。

——受けはしたけど、勢いに逆らわずに敢えて吹き飛ばされた？

追いかけてながら考える。狙いはなんだろうか。矢を射る間を確保するため？確かに、十分な距離と時間さえあれば、最初の砲撃のような矢以上の威力を出せるのかもしれない。けれど、そんな暇は与えないし、撃たれたとしても、義経なら躲せる。いや、躲す！

果たして衛宮君は、弓に矢を番えていた。一目でこれまでと格が違うとわかる、真つ黒い『剣』。そして、何よりも予想外だったのが——

「後方注意だ、悪く思え。——赤原猟犬！」

衛宮君と義経を結ぶ射線、その延長線上。義経の背後に、城外から衛宮君が射た攻撃で倒れた従者部隊の人がいたことだ。

——避けられない。躲せば、確実に後ろの人は死んでしまう。

——受けられない。斬れば、義経の腕は壊れてしまう。

選択肢は1つしかない。刀を矢の下の潜り込ませ、無理やり頭上に軌道を逸らす！

「はああああああつ——！！」

渾身の力を込めて矢を流す。追撃が来るかと思っただが、衛宮君は何もしてこなかった。大技は続けて撃てないのか、それとも最後の切り札だったのか。……………答えは、そのどちらでもなかった。

「衛宮、君…………？」

刀を構え直して向き直った先にいたのは、見知った赤毛の少年では

なくて。浅黒い肌に、白い髪。赤い外套を羽織った青年だった。

「……霊基再臨。まあ、石田の光龍覚醒と似たようなものだ。あれ以上時間がかかり、時間は限られている上に燃費も悪いがね。未来の可能性の一時的な先取り、とでも言えばいいか」

「つまりそれは、衛宮君の未来の姿、なのか。凄いな、義経よりよほど英雄然としているぞ」

威圧感は3倍増した。義経は素直にそう思ったが、衛宮君は苦笑いして否定した。

「私は自分のことを英雄だなんて思っただけはないし、その資格もない。これも、本当は使う気なんてなかったんだ。だが——マーブルたちは、冬馬や準に手を出した。ユキを、悲しませたんだ」

……胸がズキリと痛む。クラスメイトの2人。そして、もう1人。

『士郎！トーマ、トーマと準が……！』

『『俺』の——俺の家族は、絶対に返してもらおう！決着をつけようか、義経！』

源義経から見た赤い弓兵2

——背後から、何か恐ろしいモノが来る。

背筋がぞつとするほどの恐怖に慌てて横っ飛びすると、一瞬前まで自分が居た場所を赤黒い『矢』が物凄い速さで通り過ぎていった。あれは……さつき、義経が上空に逸らしたはずの!?

その驚きも一瞬で途切れてしまう。慌てて飛び退って不安定な体勢でいるところに、衛宮君から放たれた矢。躲せない。刀に気を込めて無理やり叩き落とす、けど……!!相変わらず戦車砲のような衝撃——どころじゃない。確実に、先程より威力が上がっている。

「悪いな、どんどんいくぞ?」

再び弓を構え、何も無い手の中に矢を生み出す衛宮君。そして、予想通りではあるけれども、驚きに満ちた光景。

——あれだけの威力を保った矢が、ぐるりと向きを変えて義経目掛けて戻ってくる。

あれはだめだ。躲すか、流すしかない。なのに——絶妙なタイミングで、衛宮君から矢が放たれる。結果、どちらかは無理して受けなくちゃならない。……ジリ貧だ。敵ながら、衛宮君は強い。何より、戦い方が上手い。それに、あの『矢』。

刀のように常に手に持ったまま、そこから気を込め続けるなら兎も角。一度矢を放ってしまえば、放つ前に込められた気はやがて消えてしまうはず、なんだ。それなのに、義経が受けきれないほどの威力のまま、何度躲しても義経を自動で狙い続けている。

「無茶苦茶だな、衛宮君は！まるで武神、川神先輩みたいだ！」

「無茶苦茶なのは私ではなく、あの『矢』自体だよ。私自身は武神とは比ぶべくもない——そら」

義経の言葉に、衛宮君はいつの間にか弓を消し、両手を空に向かって広げて答えた。

「瞬間回復なんてデタラメな技はない。一太刀浴びせれば、君の勝ちだぞ?」

……明らかな、挑発。そして、きつと罨だ。どうする?

——あの面倒な『矢』は、先程躲した。距離を詰める余裕はある。

——衛宮君の手に、弓はない。矢を放つまで、二呼吸の隙はある。

——きつと罨だ、間違いない。それを乗り越えるのが、英雄だ。

「……………」

無言で刀を正眼に構える。衛宮君も、両手を広げたまま、その中に同時に双剣を出現させた。接近戦を受けて立つ構え。……まだ、動かない。

遙か上空で、矢がぐるりと向きを変えたのが僅かに見えた。戻ってきたとき、衛宮君を巻き込めるように、タイミングを調整する。それは、きつと衛宮君もわかっている。

——静寂。

「はあっ!!」

先に動いたのは、衛宮君。今までは明らかに違う、渾身の力で双剣を投擲してきた。流石にそれなりの力だ。石田君を超えているかもしれない、けれど——弁慶には、力も速さも及ばない!

姿勢を低くし、地を這うように迫ってくる双剣の下を一気に潜り抜ける。それを見て衛宮君は即座に新たな双剣を両手に構えた。気配を探ると、先程投擲された剣はまだ背後にある。もしかしてとは思っていたけど、衛宮君は色々な武器を複数同時に、弾き飛ばした数から考えるとそれこそ無限に思えるほど生み出せるらしい。なんて、デタラメ。

義経をしつかり見据えて片手で黒い剣を振るってくる衛宮君。
……そこで、違和感。この、気配は——背後？

「うわわっ!？」

振るわれた衛宮君からの斬撃を受け流しつつ、この前テレビで見たフィギュアスケートの選手みたいに上体を反らす。かなりのギリギリで、義経の背後から戻ってきた白い剣を回避した。その剣は通り過ぎていったところで消えてしまったけれど、衛宮君が今度はその手に持った白い剣を振るってくる!

先程衛宮君は黒い剣を振るって、白い剣が戻ってきた。なら今度も——まずい。

「くっ……はあっ!!」

上体を反らせたまま、後方宙返りの要領で真上に跳び上がって斬撃を躲す。衛宮君が振るった剣の腹に着地して、更に上へ!上へ、上へ。十分に飛び上がって……義経を見上げる衛宮君に向けて、急加速する。これで——決める!

衛宮君はそんな義経を静かに見つめて——両手に構えた剣が、羽のような形に巨大化した!?

そのまま、与一が好きそうなかっこいいポーズで義経目掛けて跳び上がってくる。……衛宮君も、これで決着をつけるつもりみたいだ。望むところ!

「はあああああああつ!!」

「おおおおおおおつ!!」

交差された双剣と、その中心に合わされた刀が空中で火花を散らす。拮抗は、一瞬。加速の勢いと重力が合わさり、すぐに義経の刀が衛宮君の双剣を押し始める。

衛宮君の両手は塞がっている。新たな剣は生み出されはしない。これだけ密着していれば、あの『矢』が戻ってきてても2人とも巻き込む。爆発しても同じだ。

地面が迫る。決着が近い。

「はああああつ!!」

渾身の気を込めて刀を押す。これで、終わりだ!

着地。そして、轟音。

衝撃で舞い上がった砂埃が晴れると、衛宮君はもとの年相応の姿に戻っていた。その手にもう剣は握られていない。義経の刀は、袈裟斬りの太刀筋で——皮一枚を斬って、止まっていた。

あと少し。あと一息。ほんの少し力を込めるだけでいいのに。……義経の体は、自分のものじゃなくなったみたいにピクリとも動かなかった。

「手の中以外にも、剣を出せたんだな、衛宮君は。それに、今の刀は……」

じわり、と左腕から血が浮かぶ。着地寸前、突然空中に現れた禍々しい刀。猛烈に嫌な予感がして、刀の軌道を正中から袈裟に変えて身を振るも、避けきれずに皮一枚を斬られてしまった。そのたった皮一

枚で、今こうして動けなくなっている。

「態々手の内を明かすこともないからな。さっきの刀は、痣丸。平景清の佩刀で、源氏に対して特攻を持つ『源氏殺し』の刀だ。……いつとくけど、かなり劣化はさせてるぞ。そうじゃないと、下手したら義経は触れただけで死んじゃうからな」

肩を竦めながらあっさりとそんなことを言う衛宮君。敵わないなあ。あれだけ素敵な薄緑が創れるんだ。そういう刀も……ああ、目が霞んできた。

「やっぱり、衛宮君は、無茶苦茶だ、な……」

「気軽に自力で物理法則を無視してくる人たちに言われたくはないな」

そんな言葉を最後に聞いて、義経は意識を失った。

P r o m i s e d p l a c e

川神一子から見たシロ君

——シロ君は、昔から静かな子どもだった。

上の学年の子たちから意地悪をされても。下の学年の子たちからわがままを言われても。表情を殆ど動かさずに、いつも落ち着いて振舞う、大人からしたら手のかからない子ども。でも、アタシやタツちゃんはわかっていた。シロ君が笑うのは、いつだって自分じゃない誰かが幸せな時だけだったけど。感情の……きふく？は少ないけど、本当は優しい人なんだって。

それだけじゃないってわかったのは、中学生の時。アタシは、いつもの修行のランニングの時間だった。川神院に門限前に戻る前の仕上げの走りだったから、夏だけでもう日が沈みかけ。いつもは誰もいないグラウンドに、アタシと同じ赤い髪の男の子が1人で息を切らしていた。男の子の前にあるのは、背より大分高い位置にある、水平の棒。

——シロ君が走り出す。何度も、何度も練習したにちがいない、綺麗なフォームでシロ君が飛ぶ。けれど、バーは越えられない。

その光景を、ずっと見ていた。どうしてそうしていたのかは、アタシもよくわかってないし、今でも思い出せない。ただ、修行も門限も全部忘れて——シロ君が失敗し続ける様子を見つめ続けていた。

……どれくらいの間がたったんだろう。シロ君の高跳びはまだ1度も成功していない。殆ど休まずに飛び続けているから、もうフラフラだ。きつと、今のシロ君では無理なんだろう。足りないのは、才能とか、実力とか、そういうもので。今シロ君が頑張ってもどうにもならないことなんだ。だから止めるべきなんだ——そう、思うの

に。何故か、アタシの足も喉も、これっぽっちも動いてくれなかった。その時、ドサリ、と音がする。

『——シロ君！』

金縛りが解けた体を急いで動かして、シロ君に駆け寄る。マツトじゃなくて地面に直接落ちてしまったシロ君は、右手を抑えて痛みを顔を歪めていた。それでも、まだ続けようと立ち上がろうとしている。ふらつく体を慌てて支えた。

『……一子、か？何してるんだ、こんな時間に』

『シロ君こそ、怪我してまで何してるの!?!』

アタシがそう言うと、シロ君はぼんやり空を見上げて。

『なあ、一子。運命って信じるか?』

——突然、そんなことを言いだした。

『笑っちゃまうよな。帰り際に、陸上部にやってみないかって誘われて。やってみたら、案の定届かなくて。時間も場所もお詠え向きだ。神様——いや、神霊か?どっちでもいいけど、本当にいるなら俺に何をさせたいんだろうな』

『シロ君……?』

アタシに対して言っているというよりは、我慢できなくなった何かを吐き出すように。空を見上げて何かを見つめたまま、シロ君は続ける。

『俺は英雄なんかじゃない。俺は正義の味方にもなれない。そんなの、俺が一番よくわかってる。それでも、真似事くらいはやってやるって決めたんだ。衛宮士郎はここで諦める男なんかじゃないし——ここで諦める俺に、衛宮士郎の資格はない』

言っていることは、半分も理解できていない。それでも、いつも静かなシロ君が、何かに突き動かされているのはわかった。

……その後のことは、正直あまり記憶にない。ぼんやりした中で覚えてるのは、シロ君が成功したということと、アタシがそれを見て泣いていたってこと。そして、アタシは川神院の師範代になることを、絶対に諦めないってその日改めて心に誓ったことだけだった。

「——ってなことがあったのよ」

秘密基地。10人目の仲間が加わった記念の金曜集会で、アタシはシロ君との思い出話をしていた。シロ君は恥ずかしいみたいで、ずっとそっぽ向いてるけど。

「あー、あつたなあそんなこと。あの日大変だったんだぞー。じじいの弟子たちが全員『一子をこんな時間まで連れまわして泣かせた男はどこのどいつだー!?!』って怒り狂ってさあ」

お姉さまが懐かしそうに言った。アタシは必死に止めたけど、あの時は本当に大変だった。

「昔から愛されてるなあ、犬は」

『川神院の修行僧が集団でお礼参り……絵面がパネエよまゆっちー』

「そ、想像してみただけで凄い迫力です！」

「かーっ!!中学生の頃からカツコイイねえ、士郎は!」

「意外な熱い展開だよねえ」

「だな。士郎って、昔からクールなイメージあったからよ」

「台詞はクサイけどね。ま、大和と違ってなーんか事情があったっぽいのは知ってるからいいけど。大和と違って」

「2回言わんでいい京!!たく……まあでも、その辺りの事情は片付いたんだろ?士郎」

ファミリーの皆が口々に盛り上がって、最後の大和の言葉で自然と全員の視線がシロ君に集まった。見つめられたシロ君は、自分で淹れた紅茶を飲みながら——言葉を選んで、真剣に答えてくれた。

「……まあな。元々、そう大した問題じゃない、というか。あくまで俺自身のことだったからな。ちよつとばかり……いや、かなり特殊だから詳しく説明はできないが、結局はいつか俺自身が解決しなきゃいけないことだった。英雄のおかげで、目が覚めたよ」

そう言うシロ君の顔は、今まで見たことがないくらい自然な笑顔で。嬉しくなって、アタシも笑ってしまった。……シロ君と目が合う。あうあう。その顔で見つめてくるのは反則……なんだか、皆から暖かい目で見られてる気がする。

「シロ坊がファミリーの皆にすんなり受け入れられるのは嬉しいけど、お姉ちゃんはやつと複雑だなー。だーなー!こうなったら私も弟いじって遊んじゃうもんねー!」

「わっぷ！姉さんストップストップ！」

あ、大和がお姉さまのおもちゃにされてる。

「いいことじゃないか！ファミリーの皆が幸せで僕も嬉しいし、これで九鬼の皆とも今までより仲良くなれたらもっと嬉しい！嬉しすぎて第4形態になっちゃいそうなくらいだよ。はい、士郎。お祝いのポップコーンだよ」

「ああ、ありがとうクッキー」

おお……クッキーとも早速仲良くなってるし、やるわねシロ君。つて、話を戻さないと！

「えーと、そういうわけだからお姉さま。アタシはあの日からずっと、師範代になってお姉さまをサポートする夢を絶対に諦めないって決めているの。だから——どんな試験でも、乗り越えてみせる！」

アタシがそう言うと、お姉さまは悲しいような、嬉しいような、そんな難しい顔をした。

「そうか——なら、じじいにもそのつもりで相談しておくよ。今年はこちらよつと特殊らしいからまだ確定じゃないが、多分川神武闘会が試験を兼ねることになるはずだ。準備しておけよ」

「押忍!!」

シロ君と風間ファミリーとして過ごす夏は、いつもより熱くなるみたいだった。

クツキーから見た衛宮士郎

——初めてその人間の話聞いた時、本当にそんな人間がいるのかな、と思った。

——初めてその人間に会った時、なんだか無性に腹がたった。

何をしていても、殆ど動かない表情。何を考えているのかわからないぼんやりとした空気と、光を感じない瞳。僕は、元々一子のお世話をするために送られたご奉仕ロボだ。だからファミリーの皆のお世話をするのは楽しいし、ファミリーの皆が嬉しいと僕も嬉しい。

そんな感情を。人間が皆持っている大切な感情を、開発者の人たちが必死で頑張って僕に芽生えさせてくれた大切な感情を、自ら放り出して。まるで、アイツの方がご奉仕ロボトみたいだな、なんて言われてるその生き方に、なんだか無性に腹が立ったんだ。

——ある日、川神院。

「すいません、鉄心さん。無理を聞いてもらって」

士郎が丁寧に頭を下げる。こういうところは昔から、大和と同じくらい律儀だ。

「フオッフオッフオ。気にせんでえーよ。クツキーも元気にしとるか？」

「うん、元気だよ……フツ、ここに来ると血が騒いでしまうな。フンツ！フンツ！」

第二形態に変形して素振りを開始する。フハハ、今日も絶好調！

「いや、クツキーは血はないだろ……まあいいけど。それじゃあ、今日は宜しくおねがいします」

「はいよ。士郎君も、もっと気軽に遊びに来てくれてえーんじゃよ？」

そう言われたけれど、士郎は苦笑いしてる。

「俺は、一子と違って川神流じゃないですから。……ただ、パートナーとしてやれるだけのことはやります」

「一子、合格できるといいねえ」

「そうじゃの。儂等かて臍肩は一切できんが、一子に夢を叶えてほしい気持ちは皆同じじやて。弟子たちを含めての」

一子がこれから本格的に川神院の師範代を目指すことができるかどうかの試験。それは、川神武闘会——今年は、若獅子タッグトーナメントで優勝すること。タッグパートナーは自由。それを知らされた上で、一子は士郎をパートナーに選んだ。まずはお互いできることをやっていこうってことで、一子はルー師範代と特別修行。士郎は、川神院にあれこれ見学にしに来ている。

「義経や弁慶もおる。正直に言うて、優勝できる可能性は低いじやろう。しかし、それでも優勝できるくらいじゃなければ師範代は務まらないし、周りも納得せんじやろうしの」

「そう、ですね……」

なんだかかしんみりした雰囲気になる。こういう時こそ出番だ！第一形態に変形！

「ほら、早く行こう！僕楽しみにしてたんだ！」

僕がわざと明るくそう言うと、2人は優しく笑ってくれた。

「それじゃあ、行こうかの」

基礎修行。素手での修行。武器毎に別れてやる時間は、薙刀の修行。土郎は真剣に、ただでさえ鋭い目を更に鋭くして、鷹みたいな目で見つめていた。土郎の弓は私より凄い、って京がよく言うけれど、薙刀を使うって話は聞いたことがない。見学しているのは100%一子のためなんだろう。……変わったなあ、土郎。

薙刀の稽古の時間が終わると、次は百代のところへ。家族や師範代だけが入れるエリアに行くと、中庭で百代が道着姿で型の稽古をしているところだった。

「セイツー……おー、シロ坊。本当に来たんだな。あれ、クッキーも一緒なのか。珍しいなその組み合わせ」

「そりゃ来るさ。態々一子や大和に頼んでもらって、特別な許可も貰ったんだから」

「こんにちは、百代。僕はどっちかかっていうところじゃなくて土郎の見学だけだね」

んー？と百代が首を傾げる。流石美少女、かわいいね！

「なんだ、クッキーは人間観察か？まあそれはいいけど、稽古の見学く

らしいに別にいつでも来てもいいだろ。なんか特別な許可がいるようなことあつたか？」

「稽古じゃなくて……川神院の倉庫や資料室を見せてもらうんだよ。倉庫っていうかあそこの蔵だけだ」

士郎が少し離れた場所にある蔵を指差すと、百代がゲ、という顔をした。

「お前、あんな場所見学すんの？物好きだなー、まあいいけど。……士郎、ちよつとこつち来い」

百代がシロ坊、じゃなくて士郎と呼ぶ。士郎が素直に近づくと、がつしりヘッドロックして――

「二子のこと、頼むな。残酷なこと言っておいて勝手だけどさ。折れないように、お前が支えてやってくれ。今のお前なら、大丈夫だろ？」

驚くくらい優しい声でそう言った。士郎も一瞬驚いて、真剣に答える。

「……ああ、大丈夫さ。そのために来たんだしな」

「士郎は、やっぱり変わったねえ。前よりずっと、感情豊かになつたよ。僕は、今の士郎の方が好きだな」

「そうか、そうなら嬉しいな」

そう言って笑う士郎の顔は、本当に嬉しそうで。僕も嬉しくなつた。

「注意事項はこんなところかの。後は自由に見てもらってかまわんぞい。秘伝書とか文化財とか、そういうのは別の場所にきちんと保存してあるしの。そこらへんは気にせんでも大丈夫じゃ。ま、なるべく丁寧に扱ってくれい」

「ありがとうございます」

「満足したらまた声かけとくれい。それじゃあまた後での」

お辞儀をしてお爺ちゃんの前を見送って、士郎がほっと息を吐いた。士郎でも、あの人の前は緊張するらしい。

「それで、何を探すの？一子が使えるような奥義とかが書かれた本、とかはないんでしょ？」

士郎の方に向き直ると、士郎は稽古を見学していた時みたいな鋭い目で——壁にかけられた、古めかしい薙刀を見つめていた。

「目的のものは、あれだよ。川神流の初代が使っていた薙刀だ」

つかつかと近寄って、手袋をはめてからそっと薙刀を手取る士郎。

「いかにも、って感じだねえ。でも、持ち出せないんでしょ。見ただけでどうするのさ？」

士郎は薙刀を暫く眺めて、頷いたあと元通りに壁に戻して——こうするのさ、と呟いた。

「——トレース、オン
投影、開始」

言葉と同時に、士郎の手から突然青白い光が発生する。次の瞬間。士郎の手には、壁にかけられたものと全く同じ薙刀が握られていた。

「え、ええ？」

ロボットの僕だからわかる。サイズから、細かい傷まで、何から何まで全く同じだ。まるで、コピーしたみたいだ。でも、驚きはそれだけじゃ終わらなかった。

「——うん、試してみるか」

周りに当たらないように気をつけつつ、士郎が何かを確認するようにゆっくり薙刀を振るう。速度は全然違うけれど、その動きは間違いなくさつき見学したばかりのものと同じ動き。それどころか、士郎の方が綺麗にすら感じる。ど、どういうこと？

「再現には程遠い真似事だけど——まあ、一子の参考くらいにはなるだろ。帰ろうか、クッキー」

「う、うん……」

何かなんだかわけがわからない。感情豊かになって、士郎のことをこれからわかかっていけたらいいな、なんて思っていたけれど……ますますわからなくなってしまうた。どういうことなの……

黛由紀江から見た衛宮さん

——私にとって、衛宮士郎という人は、なんともちぐはぐなお人だった。

見た目にそぐわない、老成した——そう、老成したと例えたくなるほどの、落ち着いた空気と貫禄。明らかに経験を積んだ、それも歴戦の、と付けたくなるほどの戦士だとわかる眼光と佇まい。好意的か否かの違いはあっても、忍足さんやマルギツテさんが衛宮さんをついつい『同類』として扱ってしまう気持ちも、少しは理解できてしまう。

かといって、衛宮さんがモモ先輩や学園長、ルー先生のような方々。先日立ち会った武道四天王、橘さんのような強者かと問われると違う、はずだ。全力を以て、真剣に立ち会えば押し切れる。私の目と経験はそう判断しているのに——頭の片隅で、本能が絶対に踏み込むなと警告を発している。

見た目も、中身も、実力も。その全てがちぐはぐな、不思議な人。それが、私にとっての衛宮さんという人だった。

——そして今、そんな私をより一層混乱させる光景が目の前に広がっている。

行為自体には何もおかしなところはない。2人の人間がいて、一方は手本を示し、一方はそれを見て模倣する。どんな武術でも共通の、ごく当たり前の鍛錬風景。おかしいのは、薙刀の指導を受けているのが一子さんで——手本を見せているのが、衛宮さんだということ。

「あの……キャップさん。衛宮さんは、川神流の門弟だったんでしよ
うか？」

日曜日の午後、キャップさんのお誘いでガクトさんと一緒に一子さ

んの修行を見学しに行くことに。私の淹れたお茶を3人で飲みつつ見学していたけれど……あまりにもおかしい光景に、ついキャップさんに尋ねてしまった。

「いんやー？ちよくちよく遊びには行ってみたいけど、弟子になつたとか修行したとかいう話は聞いてねーぜ。弓だって、学園長が言うには『初めて会った時から教えることなんてほぼなかったわい』ってことだったしな。川神流に弓があるのかどーかは知らねーけどよ」

「そ、そうなんですか……」

返ってきたのはある意味予想通りの、でも色々とおかしい答え。どういふことなんでしょうか。

「俺様にも土郎の方がワン子に薙刀教えてるつつーのがおかしいってのはわかるけどよ。土郎が薙刀も上手かった、ってことじゃねーのか？ほら、3年の松永先輩だって、モモ先輩とやってた時は色々武器使ってたろ。あんな感じだよ」

今度はガクトさんから私に。それは、その通りです。でも……

「普通に考えれば、そうなんです。でも、あの衛宮さんの動きは……川神流の動きなんです」

「え、じゃあなに？土郎は、実は薙刀使ったらルー先生くらい強かったってこと？」

「いえ。衛宮さんも、あの動きを実践でそのまま使えはしないはずですよ。実際、今もゆつくり、ご自身の体の動きを確認しながら薙刀を運んでいますから。ただ、なんと云いますか……物凄く川神流の薙刀が

上手い人の動きを完璧に覚えて、できる範囲でゆっくり再現してる、というような。上手く説明できずにすみません」

私が謝ると、キャップさんもガクトさんも気にすんな、と笑ってくれた。

「理屈はよくわかんねえけど、ワン子にとつたらいいことなんだろう？……まゆっちは、ワン子と士郎が優勝できると思うか？」

「ええ、間違いなく。『本物の動きを見る』ということとは、とても貴重な経験です。細かい足の動き、手首の角度。それらを知るだけでも、技の精度は大幅に違ってきます。実際、一子さんの動きは今も一振りごとに良くなっています。ただ、それでも優勝できるかということ……」

「難しい、か」

言い切れなかった私の言葉を、ガクトさんがとても寂しそうな声で続けた。

「はい……。ルー先生のような方の強さを、よく『壁を越えた強さ』と言いますが、参加を決めている義経さんたちは間違いなくその壁を越えているか、壁の上にいるような実力の方たちです。先ほどお話にでた松永先輩も、それを考えると、勿論、組み合わせの運やタッグマッチであることを考えると、絶対にならないとは言い切れません」

『そもそも、どんな勝負にも絶対はねーんだぜー』

「なるほどなあ……」

暫く皆さん無言で鍛錬を見守る。少しばかりの沈黙を破ったのは、

今度もキャップさんだった。

「士郎はどうなんだ？まゆっちから見ても、士郎はその、義経や弁慶たちと戦えるくらい強かったりするのか？」

これも、予想していた問。けれど……

「……わかりません」

「わからない？」

私の返事が意外だったのか、2人の声がピッタリ重なる。けれど、私には本当にわからない。

「はい。ある一定以上の強さに達するためには、任意での気の発動と、気の大きさが絶対に必要です。意識して肉体や武器を強化すること。そして気の大きさは、その強化の度合いに直結しますから」

「ああ、京がたまーに本気出すときやってるよな！矢に気を込めるってやつ！」

「確かに……ベンチプレス190の俺様より、モモ先輩の方がとんでもねーパワーしてるもんなあ」

お2人とも強者を間近で長年見られていたせいかな納得するのが早い。

「はい、その通りです。衛宮さんは気の発動はできていても、その大きさはそれなりに見えます。少なくとも、強さの壁を越えているようには見えません。ですが……『手札が見えない』、『何をしてくるかわからない』という点で、衛宮さんほど読めない方は初めてです。松永先

輩に似ていますね」

「ふーん、そんなもんかねー……じゃあさ、ここで戦ってみたらわかるんじゃない？」

え？……ええ!?

「ほら、ちょうど一旦休憩みたいだしよ。おーい士郎——！」

「そ、そそそそそんなことを急に仰られましてもですな私にはまだハードルが高すぎるというかくぐるしかないのではというか兎に角ちよつと待つてくださいキャップさん」

「ダイジョブダイジョブ！まゆっちは後輩なんだし、士郎ももう同じファミリーの仲間なんだし、胸を貸してくださいって遠慮せずに言えればいいんだよ！」

いえ、ガクトさんそういうことではなくてですね！まだ衛宮さんとは知り合って間もないというか、島津寮の方でもないので接点も少ないと言いますか！

「まゆっちも士郎と稽古してみたいってさー！」

はうあつ!?!そんな言い方をしたら一子さんが……ああ一子さんのお顔がー！

……どうしてこうなったんでしょう。

「お、おーい黛。大丈夫か？顔が怖いぞ？」

私の正面、少し離れた場所に心配そうな顔で私を見ている衛宮さん。その横で、ちよつと不機嫌そうな顔の一子さん。すみません、お邪魔するつもりは……

『落ち着け—まゆつち—！K O O Lになれ—！』

「あー、色々テンパってるなこりや。それじゃあ……こんなのはどうか？」

——え？

衛宮さんの言葉と同時にいつの間にかその手に現れたものに、一瞬思考が真っ白になる。だってそれは、その刀は。父上が、私に特別に逃えてくれた、私の刀だ。

どこからどう見ても、私が今握っている刀と同じもの。信じられないことに、一番手に馴染んで、一番この刀を理解している私でさえ、同じものだと思ってしまうほど、同じもの。それだけでも信じられないのに——

「その、構えは——」

付け焼刃じゃないことが見ただけでわかる。わかってしまう。衛宮さんの構え、あの佇まい。あれは、黛流だ。

表情が抜け落ちて、体が自然と構えを取っていく。同じ構え。そして、同時に動き出す。示し合わせたようにお互い一の型から。同じ軌道を、同じ刀が対称に描いていく。

……ああ、わかっていた。これは、間違いなく黛の剣だ。いや、黛の剣なんてものじゃない。これは、これは——私の剣だ。

剣戟の音が加速していく。演舞、型と呼ぶにはあまりに実践的な、実戦と呼ぶにはあまりに綺麗すぎる剣の軌跡が積み重なっていく。一太刀毎に、私の剣が研ぎ澄まされ、修正されていく。

基本の全ての型が終わった時、私は自然と頭を下げていた。

「——ありがとうございます、ございました」

「こちらこそ。役に立てたのなら嬉しい」

とても優しい声でそう言われて、思わず顔がほころんでしまっ

「も、勿論です！また是非——ア」

そこまで言ったところで、物凄く悲しい顔をしている一子さんが目に入ってしまった。

「さ、ささささささ差し出がましいことを！し、失礼しましたあああああ
！」

一子さんの顔を見ていられなくなって、お辞儀をして慌てて立ち去る。

「……なんでさ」

衛宮さんの眩きが、やたら大きく聞こえた。本当に、ごめんなさい！……ハッ!!お2人とも、金曜集会で集まるんです。勢いで逃げたしまいましたけど、ど、どうしましょう……